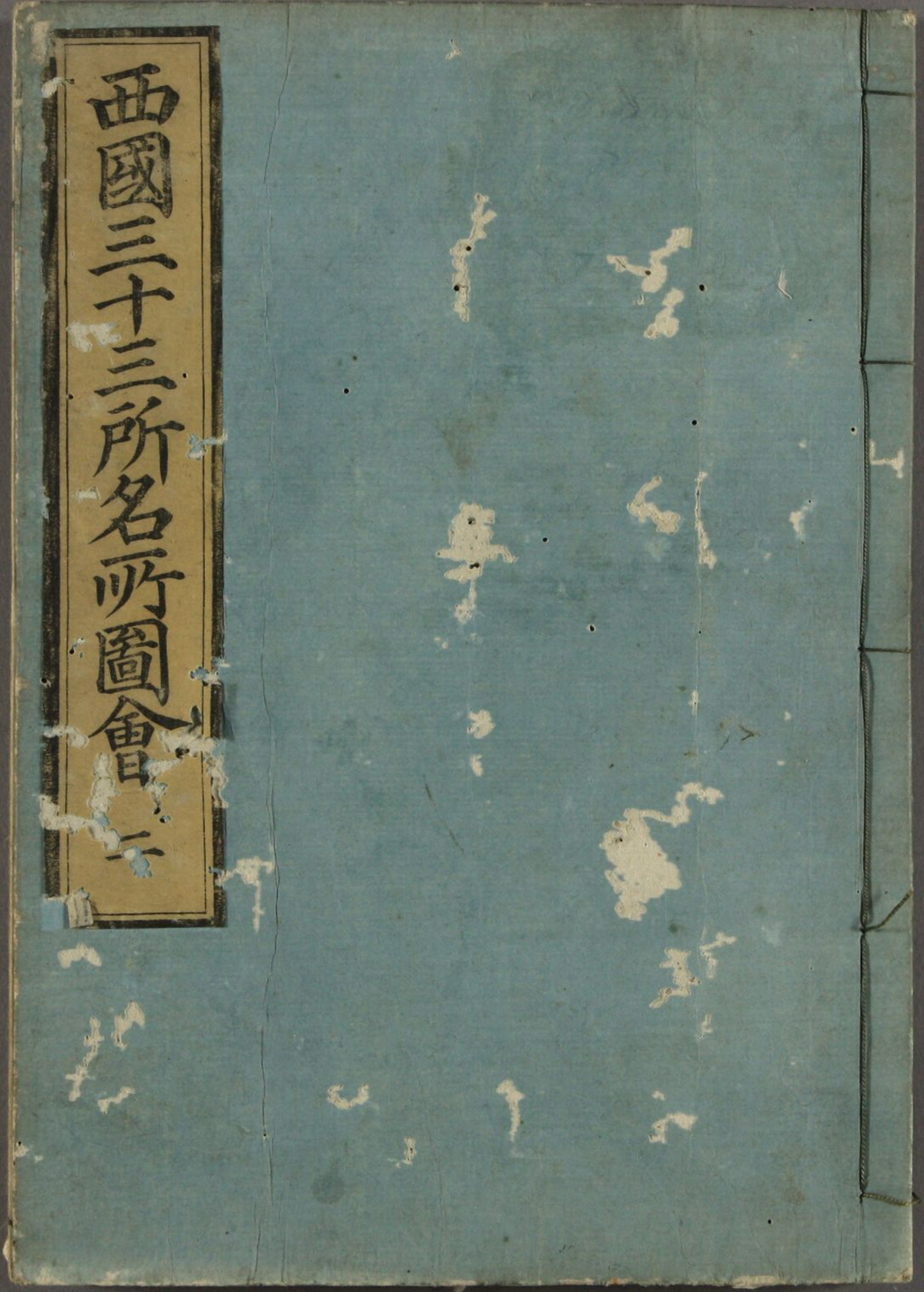




西國三十三所名所圖會二







田丸城下

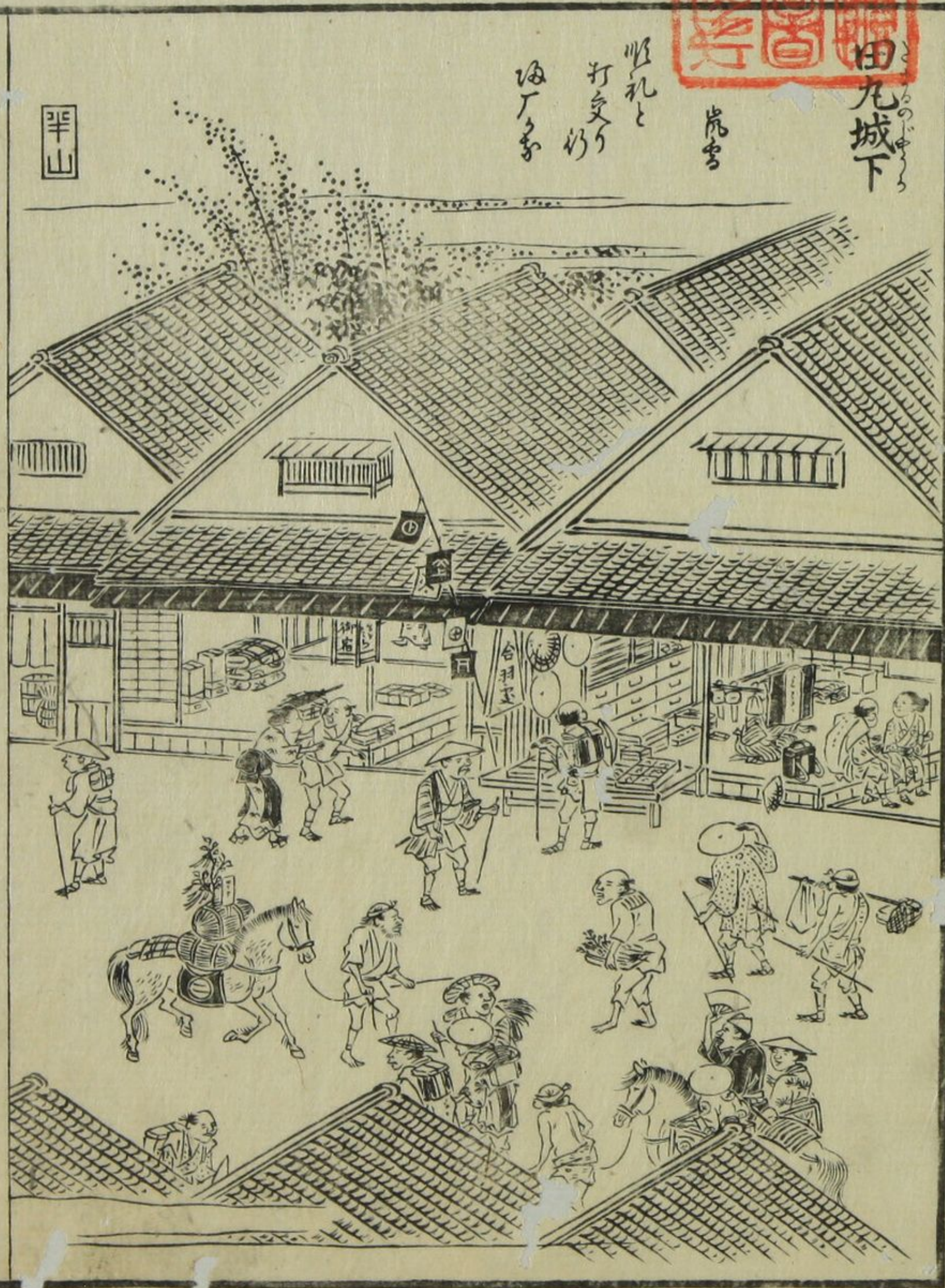
虎

恒礼と

打交り

海丁系

平山



石曜六庫



蚊野松原

神像被野と浄くあり  
 けりる凡一里半あり  
 左右唯雲のありて  
 乃ひつて平あり樹  
 是れ松茸あり生ずる  
 以て使末などとの外  
 俗人もつるにふも

常もまの文  
 久し  
 去れ  
 去え



平山

西ノ三十二

津布良神社

積良村のり所祭  
 津布良彦津布良姫三神

栲羅神社

原村のり祭神千依姫命大歳神の児ト云  
 神名帳出太神宮撰社二十四坐の内

大辻観音庵

原村東の入口のり此所大辻といふ尼僧住  
 勢州より熊野道観音堂の札あり

本尊順禮手引観世音

弘法大師と安

三十二所観世音の石像。庵室の向ふあり。○金毘羅堂。庵室あり。○行者堂。金毘羅堂並ふ  
 札納所。庵室の左隣。○撰待茶所。庵室の右隣。

○原村の大辻より五六丁まで野中村に至る當村中小岐道のり  
 右、高見越より野高野道のり  
 左、熊野順禮道建石のり

次、鳴川村と過るノツキ峠にかゝる

上下二十町許平山にて峻岨あり  
 然るも往來少く道す

湧福智山國東寺教授院

國東山にり天台宗山門惣持坊流聖德太子の同基  
 本尊十二面観世音と安。聖德太子御作といふ俗小國東の観音、祇住

相可瀬村の在中に道標の建石あり。相可瀬より三丁あり山分あり  
 観世音の利益あり。遠近より参詣する人多し。由未縁起ありともども畧之

相鹿上神社

相可瀬村にり當村にあり。時と下りて至る

是より多氣郡

相鹿木太御神社

右同村にり  
 延喜式神名帳出

相鹿牟山神社

同上

無量山十福寺

柳原村にり。真言宗

本尊 順禮手引観世音

札納所 本堂の右にり

鐘樓

本堂小對

鎮守祠

本堂の右隣

僧坊一院

行暮る順禮の旅人此寺を頼して  
 一夜未覺するものあり。同



原大辻観音庵

観世音の梵跡

新譯梵語

阿利耶聖阿嚩盧吉多觀

伊濕嚩囉自在

此聖觀自在と翻

新譯中天竺の正音あり

故觀自在と正翻と

又楞嚴經の意觀音の

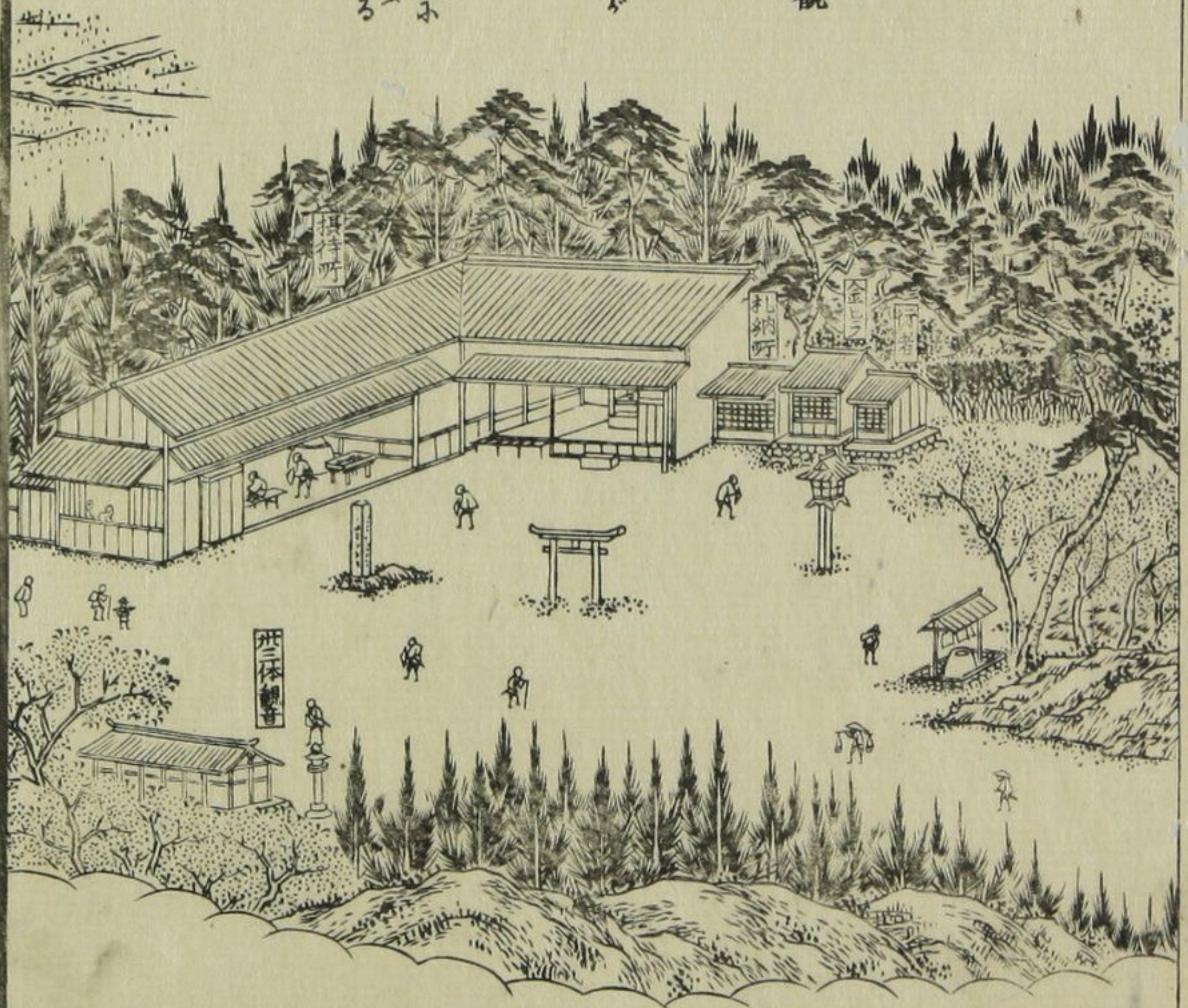
四通八耳聞音聲あり故

衆生の南無觀世音と唱る

音聲と觀と即時に

其苦患と解脱せしめり

此と頭換眞傳と



拈花示衆の向す  
攝石あり  
勅して曰

順禮導引觀世音

慈跡あり

觀世音

不淨の人と

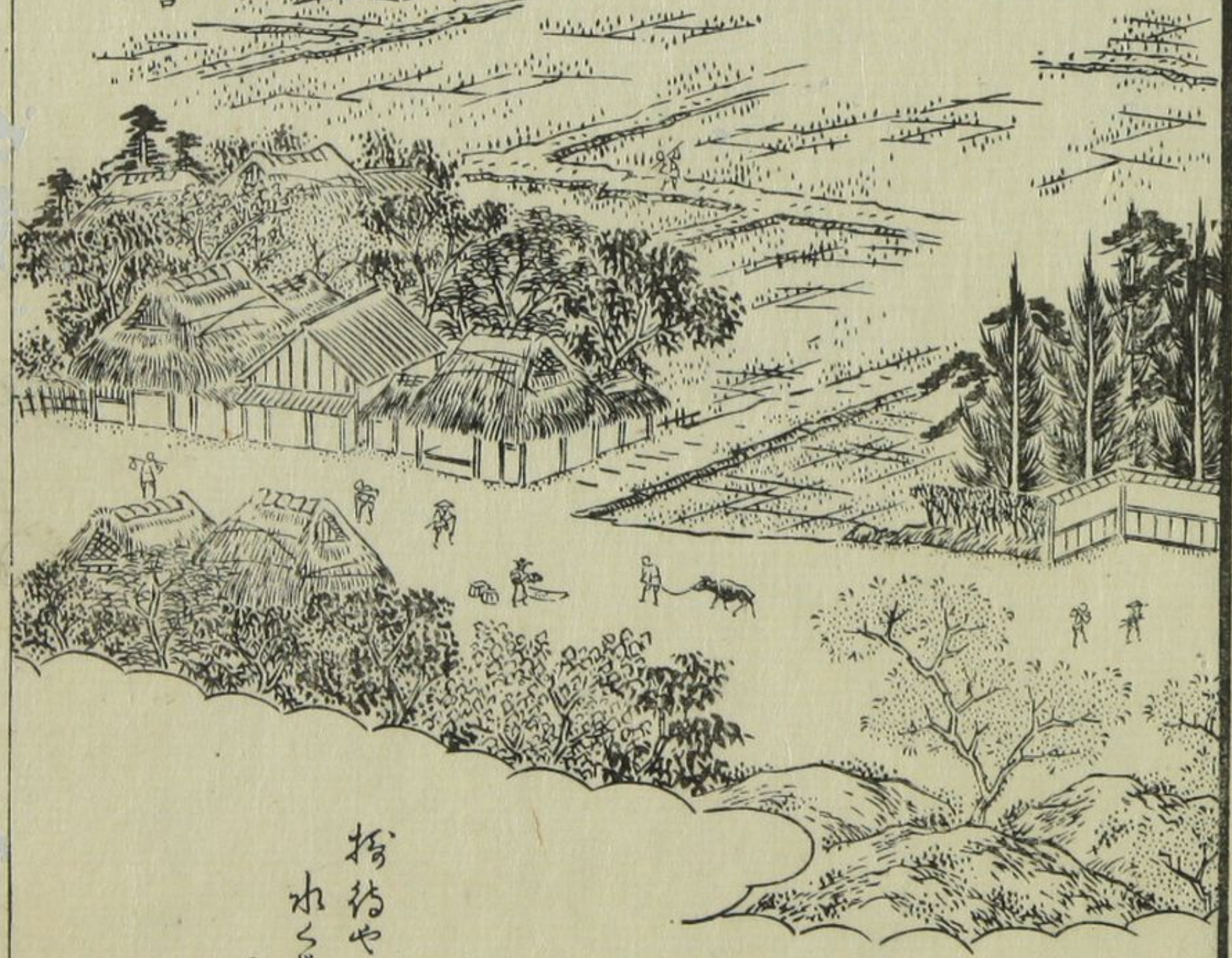
法樂

曉乃あり

蓮花あり

越后洲高田善導寺

廿九世 海峯



拈花也  
水と茶の  
物あり





○ 當柳原村を經る  
 行程凡一里半余

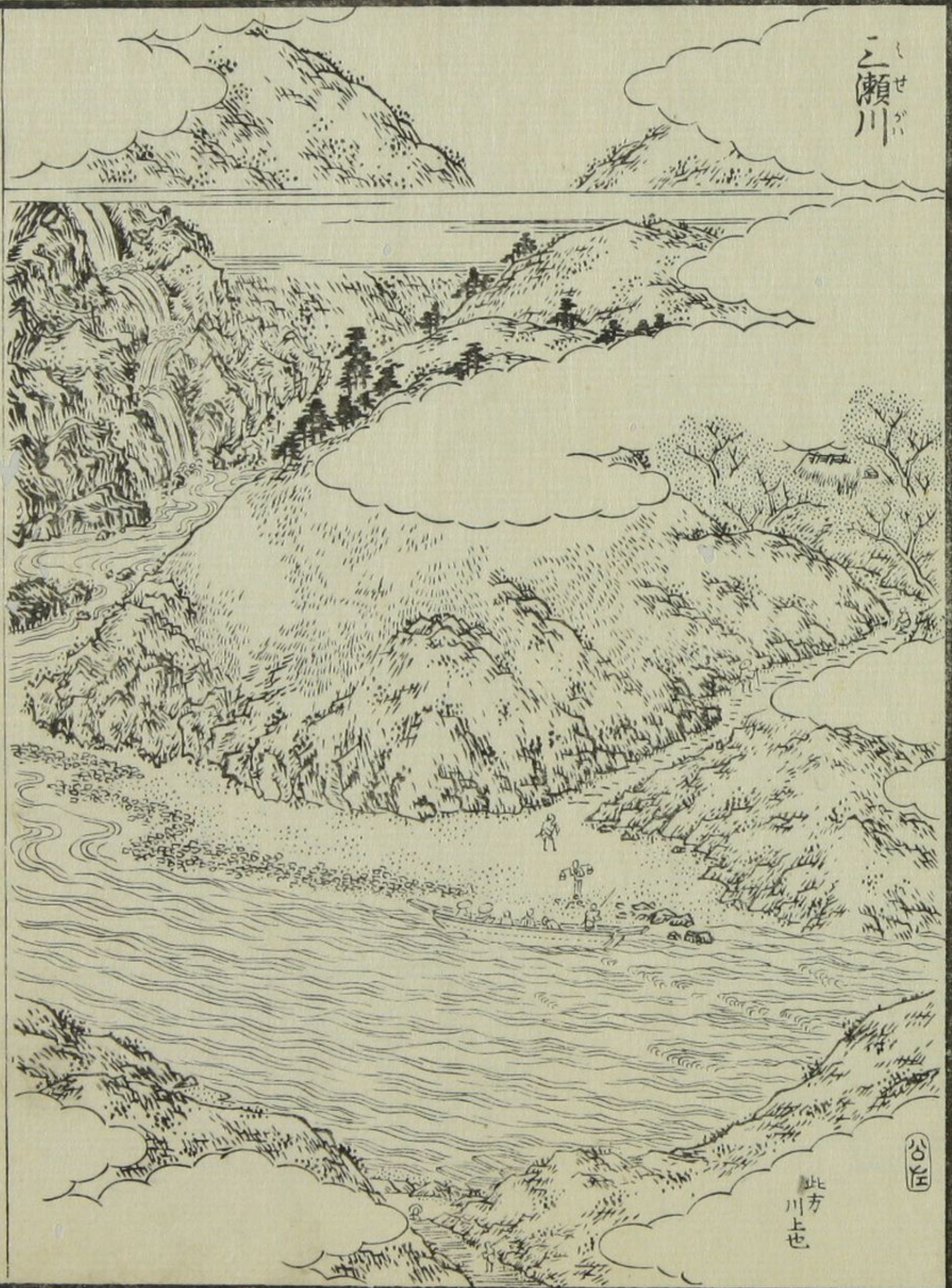


無量山千福寺

八〇五

西ノ三十四





瀬川

此方川上也

○振原より下楠上榊と過る栗生村に至る此間凡二里なり凡て坂路多く道行く  
栗生より瀬川行程一里余坂路高くと道

三瀬川 瀬川の端より舟渡す此川宮川の川上より水源ハ吉野大臺より出る  
晴雨より西風つれ時ハ必り水増多し度場の下は遠く風景より

多岐原神社 瀬川の向う岸左の上の方より此地ハ穀生と禁伐 此地度會郡ノ属ハ  
太神宮撰社二十四座の内ニ 祭神 真名子神ト云

延喜式神祇五云 齋宮祈年祭神百十五座 大社十七座在齋

小社九十八座 在丹氣度 會兩郡 中畧 多岐原社云

祭料座別結三尺。木綿二両。麻五両。庸布一丈四尺。楯一枚。八座置。四座  
置。各一束。鱈。堅魚。各六両。腊。塩各五合。海藻。滑海藻。雜海菜。各一両二分。  
酒一升。柑一口。惣祭所須麩三口。匏三柄。薦五枚。祝詞料庸布五段。造幣  
忌部三人。明衣三段。短帖一枚

右祭二月四日供祭。其六月十二月月次鎮火饗道大殿御贖大拔并

朔日忌火。庭火等祭供神物。及明衣。祝詞料。皆准在京云

三瀬坂 上下凡廿四丁余坂嶮ニ瀬川ハ此ノ峠ニ岩屋の地藏有り傍ニ休息の出茶屋  
軒あり是より下つて野尻村に至る瀬川野尻村の村中へ凡十町余の左の山林の内へ入本

龍原宮 野尻村より龍原大神宮と称す野尻の村中へ凡十町余の左の山林の内へ入本  
宮の傍へ出る是より正面一の鳥居かけ抜くと逆通一圓。杉の大樹生髮りて尊一



二瀬嶺

あつた  
道人

旅人もあつた

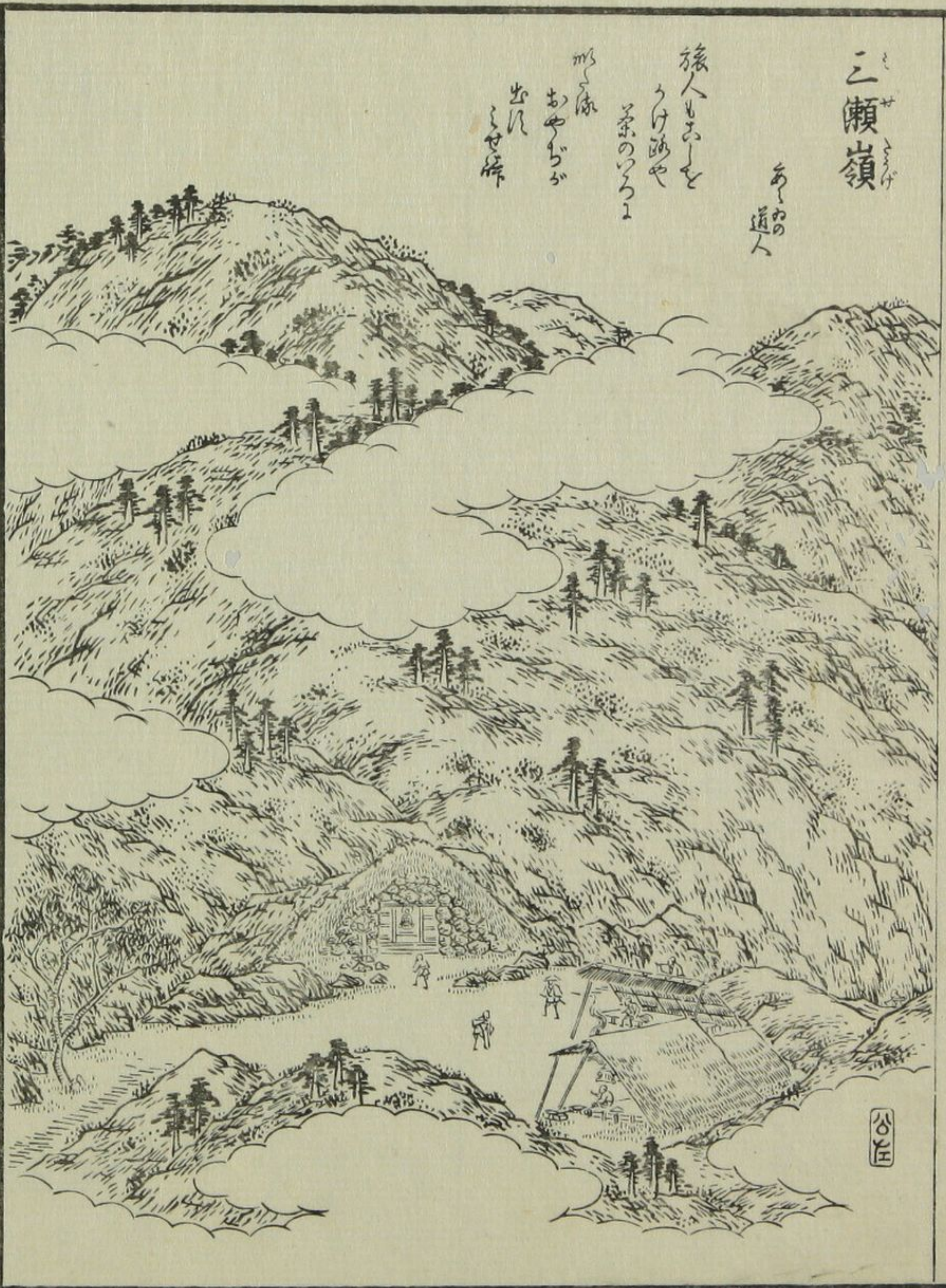
うけあや

茶のつら

あやちか

出れ

とせ



本宮一座祭神速秋津彦命 並宮一座祭神速秋津姫命

興玉社 本宮の左の方より俗 寶庫 本宮の右の傍 抜所社 宝庫の傍に有

神樂殿 御供殿 神官詰所 橋の辺左右より 一之鳥居 往來の左より

當社内宮茅の別宮より二宮のいひく 廿一年一度 公より御造替

りて遷宮奉る事嚴あり尤兩宮より一年前に行き 夏伊雜宮一同

其結構萱菅より千木 榿木御門御垣 兩宮より彷彿より御師の館に村

中より多りの鳥居内外に橋より高欄擬寶珠造より往還の右の傍に

神宮寺より本尊不動明王と安別一社三射の觀音堂あり 例祭九月廿日

風雅 流の系あつたの文は神宝を名けく沖津あつた 為家

延喜式神名帳、度會郡五十八座の内大社十四座の一瀬原宮 大月次 新堂

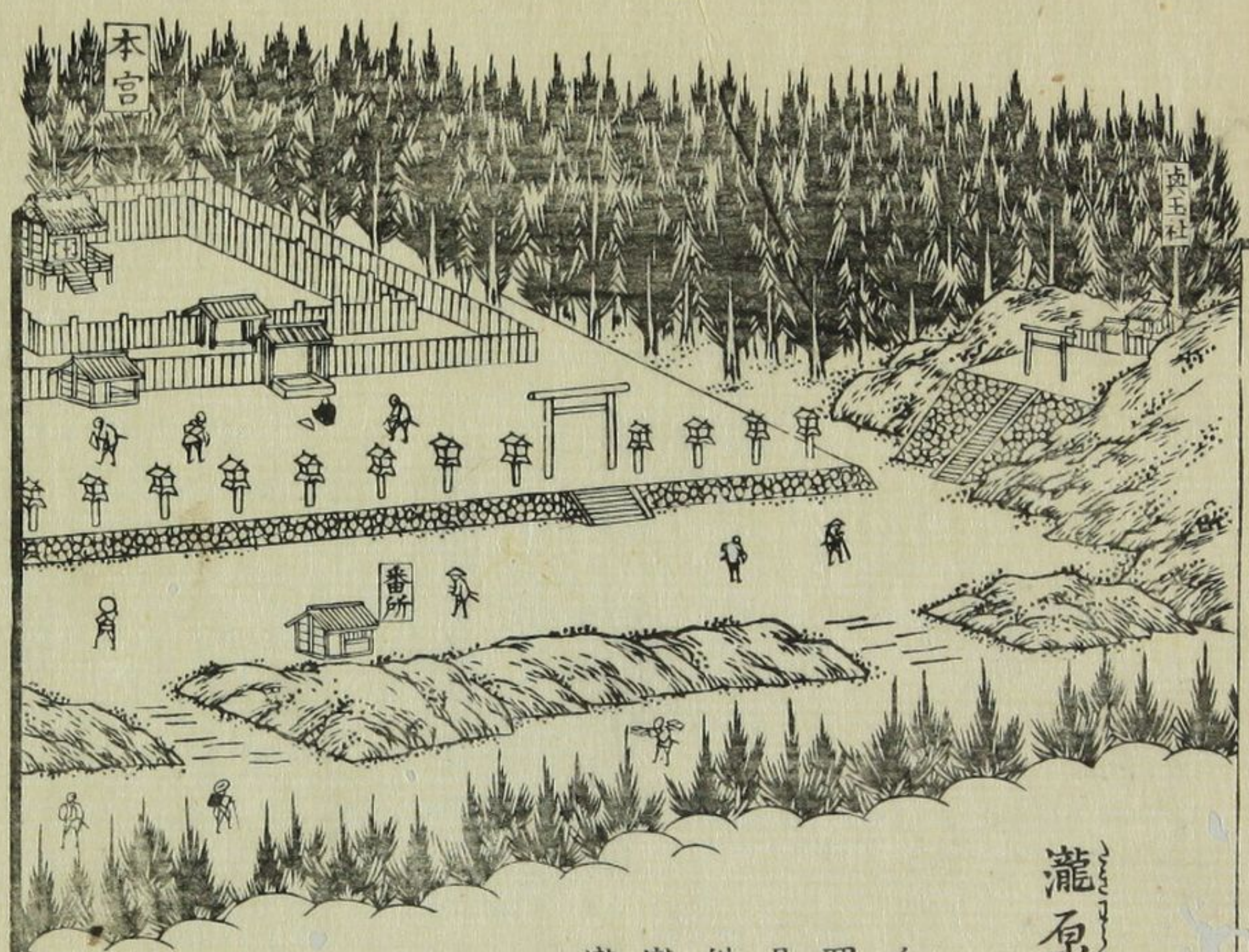
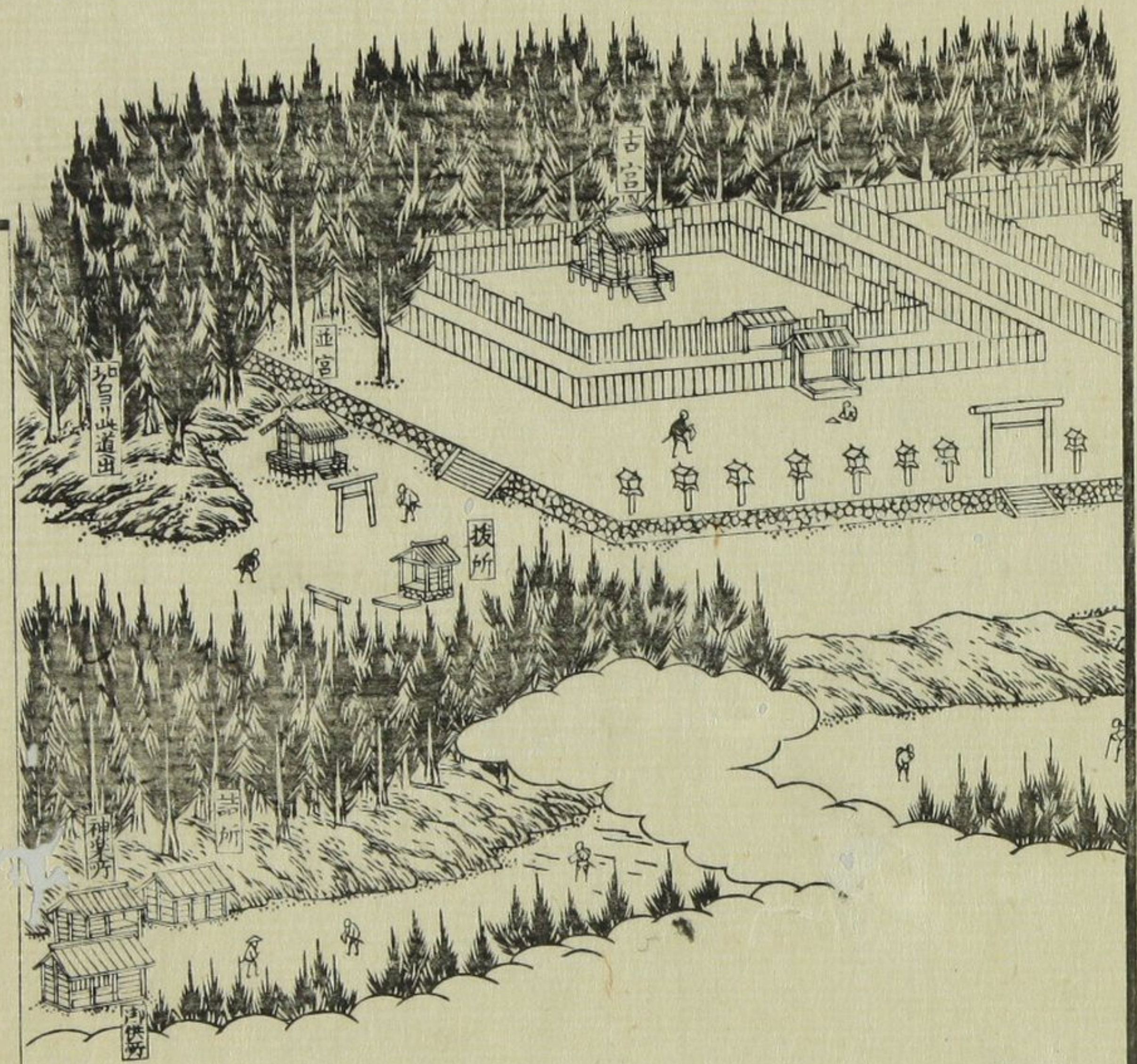
同神祇式云瀧原宮装束 絹蚊屋二條 一條長七尺六寸廣十二幅 絹幌一條 長六尺 廣三幅

土代細布帷一條 長七尺七寸 廣三幅 緋衣一領、紫單衣一領、帛衣一領 各長二尺 裁替裳一腰

帛裳一腰、紫紗裳一腰 各高二尺腰長 帛被一條、絹被一條 各長七尺 絹帳一條 長七尺 廣三幅

二尺半長四尺 帛被一條、絹被一條 各長七尺 絹帳一條 長七尺 廣三幅





瀧原宮

延喜式  
 四月九月神衣祭之條  
 是日笠縫内氏等  
 供進蓑笠 中畧  
 瀧原宮二具  
 瀧原並宮具云云

祈るより神も  
 さしつかへ  
 形もあ  
 云々  
 氏あ  
 定家





其二  
 一之鳥居  
 神宮寺

佛より  
 林を  
 寺のまへ  
 まで



公左

西ノ三十八

古事記神代記  
 速秋津日子  
 速秋津比賣  
 二神因河海  
 持別而生神  
 名沫那藝神

持玉の川と海  
 ちの系より  
 ちの系より  
 直之



神宮寺



**紀伊**

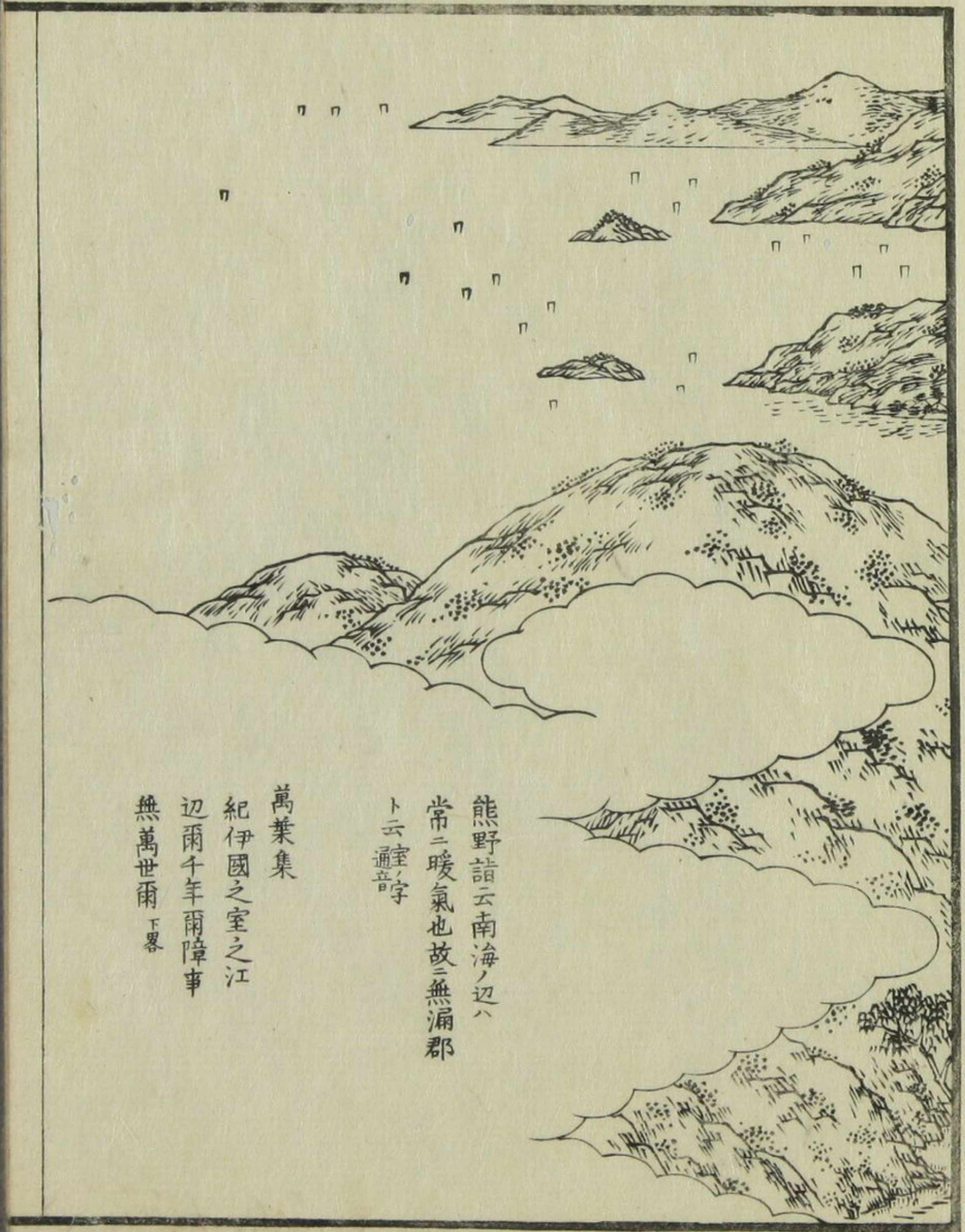
紀伊國ハ上管七郡トテ東南西の三方ニ蒼海ヲ臨ミ北ハ我々ノ山岳魚鳥ハハ薪柴材木多ク頗る大國ヲ云深山ヲトシテ南方其國

○當野尻村の間凡二里許リ至テ至テ長一是トテ河曾柏野崎村同引大津梅谷ホト  
經テ二坂峠ト至ル此間行程凡六里多ク通條谷川の多ク常水ハ流レテ川水  
水ノ流レハ山の根トシテ通行ハ尚同引トテ梅谷の同石洞トテ地形ハ  
二坂峠トシテ紀州の嶺あり伊勢の嶺の如ク二十六丁道紀伊トシテ八五十丁  
二坂峠 荷坂峠トテ書リトリ十二丁トテ十八丁トテ伊勢紀伊兩國の界ハ勢州山甲トテ當國  
峠トテ向トテ眺望ハ東南の滄海渺々トテ紀の路の浦トテ遠近連テ長嶋二江  
おんと眼前にあり風景言語ハ絶ハたの嶺トテ紀伊國の領分ニ

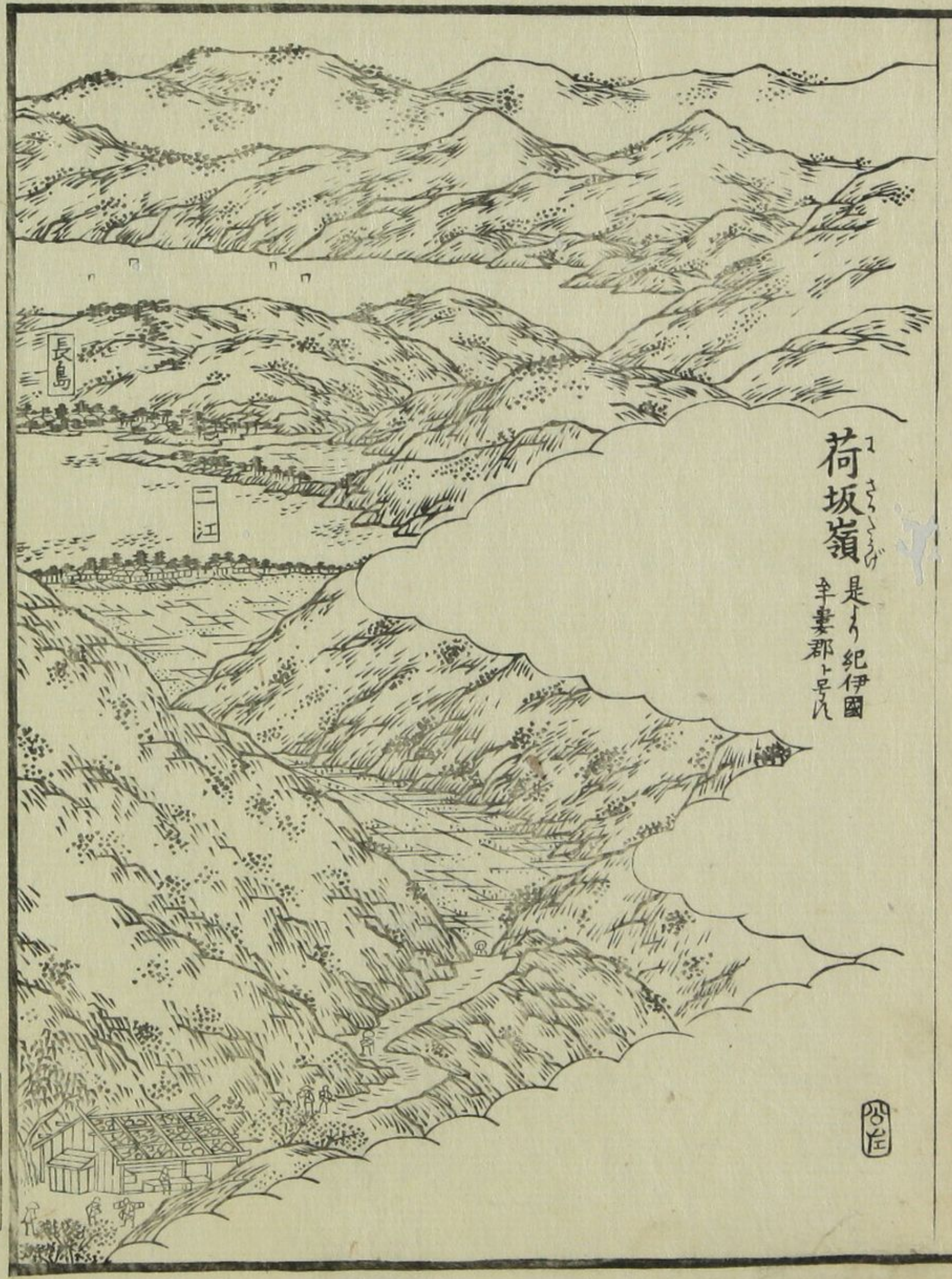
ちの故一風土暖氣ヲ一  
古書ハ木斎トテ後改メテ紀伊ハ唯貴トテ讀テ伊トテ畧ハ則攝津トテ畧トテ  
撰津國トシテ如トテ原當國ハ本國トテ神代卷ハ素盞盃鳥尊其御子五十  
猛神トテ新羅トテ至リテ時樹種トテ多ク持テ天降リテハ彼地ハ植ハ  
トテ悉ク日本トテ持テ終ニ筑紫トテ始メテ大八洲の國トテ播殖ハテ所  
青山トテこの故一五十猛神トテ林トテ有切の神トテ則ち紀伊國一鎮坐ト  
ケハ又鬚髯トテ抜テ散一ケハ杉トテ胸の毛トテ抜テ散一ケハ檜トテ尾の毛  
被トテ肩毛椽樟トテ時一五十猛神の妹トテ大屋津姫命次トテ撰津姫  
命トテ二神トテ木種トテ施一ケハトテ當國トテトテ木トテトテ國

あれバトテ當國に鎮座一ケハ是トテ其トテハ本國トテ林トテトテヤ  
五十猛神ハ當國名草郡伊太祁曾神社の神依テ大屋津姫命ハ同郡宇田郡一神社トテ  
撰津姫神社ハ同郡吉礼村トテトテ紀伊國名所圖會見トテ  
心是トテ紀伊國の嶺トテトテ名所圖會見トテ紀伊國名所圖會見トテ  
會一トテトテ其トテトテ類トテトテ紀伊國名所圖  
彼書トテ同トテ其密トテトテ類トテトテ紀伊國名所圖  
又所ハ風景の圖トテ加テハ婦女子トテトテ類トテトテ紀伊國名所圖





熊野詣云南海ノ辺ハ  
 常ニ暖氣也故ニ無漏郡  
 卜云室ノ字  
 通音  
 萬葉集  
 紀伊國之室之江  
 辺雨千年雨障事  
 無萬世雨 下畧



荷坂嶺<sup>ナカサカ</sup>  
 是乃紀伊國  
 辛婁郡ノ号凡

谷庄

西ノ四十





半山



熊野の  
名義

西ノ四十一



熊野山畧縁起同人王第一神武天皇卅一年辛卯高倉下尊自天盤舟に乗て  
斯秋津嶋と回りの山に及り紀州の南郊に至りて時大蛇の熊なり其長丈  
余とて金色の光を放ち無量の奇瑞光中に見たり尊斯示現と拜天告と  
美さぬくの靈夢と感ト神蔵の宝釵と得たり是を以て國中此邪神と伏せり  
ふ合あともく安んどの今の神蔵に其靈地あり熊野の名ハ斯時始るなり  
按古事紀神倭伊波禮古命從其地紀伊國廻幸到熊野村の時大熊  
髪出入即去云々流布の本男水門如此あれも梅尾山所蔵熊野山縁起古事  
紀の文と引るハ大熊鬃髯出入即去云々かの有ハ伴蒿溪が説  
尤此熊の故事と以て熊野地名の原始ハ記さるるも既ハ上文ハ血と洗ひ  
一所ハ血沼和泉茅渚とい男建ヤ一所ハ男水門と言ふと見へるまづ公全  
脱文脱文も有んらるるかに熊野山の縁起ハ斯ハ記ヤ一者あり  
熊野遊記曰牟婁者紀之南無通曉四島遐陬八東掖勢負和炎壤  
以窮名山大川錯繚乎其間土毛水産殷克於其中上古未立郡稱

爲熊野 孝德帝時定爲牟婁郡有三山曰本宮也新宮也那智也  
是曰三熊野實鎮南方 平城帝而降龍駕之宰相繼六世而左著  
焉水最大而出自金峰流其下者特稱熊埜川其餘山川村落一被  
以熊野而不以牟婁蓋巨熊野之名起乎太古也今皆在干紀之封  
内以故 紀公世一拜云本宮者在熊野川上游東南七里而至那  
智又五里至新宮新宮者在熊野川口臨干海焉自紀北循海至新  
宮曰大邊地自甲邊城折而左至本宮曰中邊地自高野曰無果越  
自伊勢曰八鬼越云々  
長嶋浦 荷坂峠十八丁下リ 二郷渡 二郷村より舟地へ  
長嶋浦 長嶋村より上リ此浦里に  
此長島の浦里ハ入海の船着くハ萬端ハ便宜の地あり故ハ商家旅駕屋  
鱧鮓製て市に出ル殊ハ輕節と數多製と故ハ家毎の軒ハ竹簾と



のて鰹の肉を乾し或ハ磨り又ハ削りて往來の左右地方せんに並べ  
し諸國に於て熊野節と稱する此辺より出るるは因云鰹字ハ堅魚の二  
字と合せて制す俗字にて是なり

和漢ニ才圖會曰鰹以堅魚二字為鰹蓋鰹乃鯛大者非是也此魚脯極  
堅硬可削用故俗呼曰堅魚云則堅硬而色赤如和節故名鰹節云  
在堅魚云々名萬葉集に出て古く延喜式和名抄ハ堅魚云々

錦浦

長嶋の東一里をくぐり浦の長サ八九丁許。街道より此地より志摩國  
後拾遺 名よるは海とすて凡れがづね海士ハあるなり

一石峠

古里坂より長島より古里一 海野浦 古里坂の傍の方へ街道入りあり

鋸坂

馬坂より云道急あり古里より 道瀬浦 同瀬も云道瀬村あり

三浦山

坂道急あり三浦坂より峠と下つて三浦の里より長島より凡て五十丁道へ  
長嶋の浦里より三浦の浦より事 行程二里許あり通より云々三浦より木の舟の舟り

始神坂

三浦より馬瀬より三浦の浦より 馬瀬川 馬瀬村の入り口より此地に宿休野あり  
凡一里道あり

木戸川

馬瀬村より鳥居寄村を経て 中里川 中里村より上里より中里船津新田  
上里村に至る上里村の入り口あり 舟津ホを経て杉本より

便山川

親言より近年尾洲の人建る所ありすて此街道川多し  
古本村の出端より平日歩行する高水ハ河上便山村に舟りあり

間越坂

古本村より坂の麓まで凡半里をくぐり峠の上下一里坂路とて敷石して頗る  
難なり峠あり峠に地藏堂あり前茶屋一軒あり

岩船山地蔵堂

同越の峠より堂前茶屋一軒あり  
これより左の峯に天狗岩天狗の岩屋あり是より尾鷲島へ出る道あり

天狗岩

岩船地藏堂の左の山上より峠より凡六丁をくぐり岩の傍に一面の板蓋の小堂と立役行  
者の木像を安置し長凡一尺二寸斗。此地街道より廻て尾鷲島出る然るも雨天と行は

天狗岩窟

天狗岩より下十斗斗下より岩屋の奥行凡二間余高二間半余内九尺二間の堂と立  
石佛の觀音と安長一尺五寸斗弘法大師の作と云岩屋の左右並二体の石佛の觀音と立

尾鷲

古本より行程一里半 此地も船着して工商の人家を列りり旅駕屋  
同越の難野と下つて至る

煮賣屋

煮賣屋ありと云よりりて近隣におびるに敏花あり是より八の濱むらお  
つら八鬼山より 尾鷲島より八鬼山の麓まで凡十余丁あり

藥王山光林寺

尾鷲北村の西中井村の北より禪宗之因基詳あり  
本尊十二面觀世音作者未詳古佛

什物大般若經

一節は花經より弘法大師の筆に繁の像思恭の筆十善神の像  
筆者不知觀音地藏不動の像筆者不知名勝畧誌に見る

松木古趾

尾鷲島の庄大曾根村の東南七八丁九鬼村の西北より中古行野浦の民屋と  
此所よりつて其名をとり今ハ行野とあり 街道よりあり





天狗岩  
岩船地藏堂

平山

地藏堂

此地ハ叙陽勝仙法を修一熊野山の松本の嶺とて睿山の舊友一逢て談話して  
 去ア一ノ元亨叙書に云つハ此地ありと云  
 名勝畧誌  
 大意

中川 尾鷲より矢の渡一ツツ  
 矢根川 矢の渡村の向ハ八鬼山の麓あり

八鬼山 上り五十丁下り四十五丁山路峻し一ツツ至つて嶺あり地上多く石と敷て道と  
 堅むるは坂急ありて杖とて過つたは必ら転倒下りて慎むべし  
 日輪寺 八鬼山の嶺より一丁此がなり

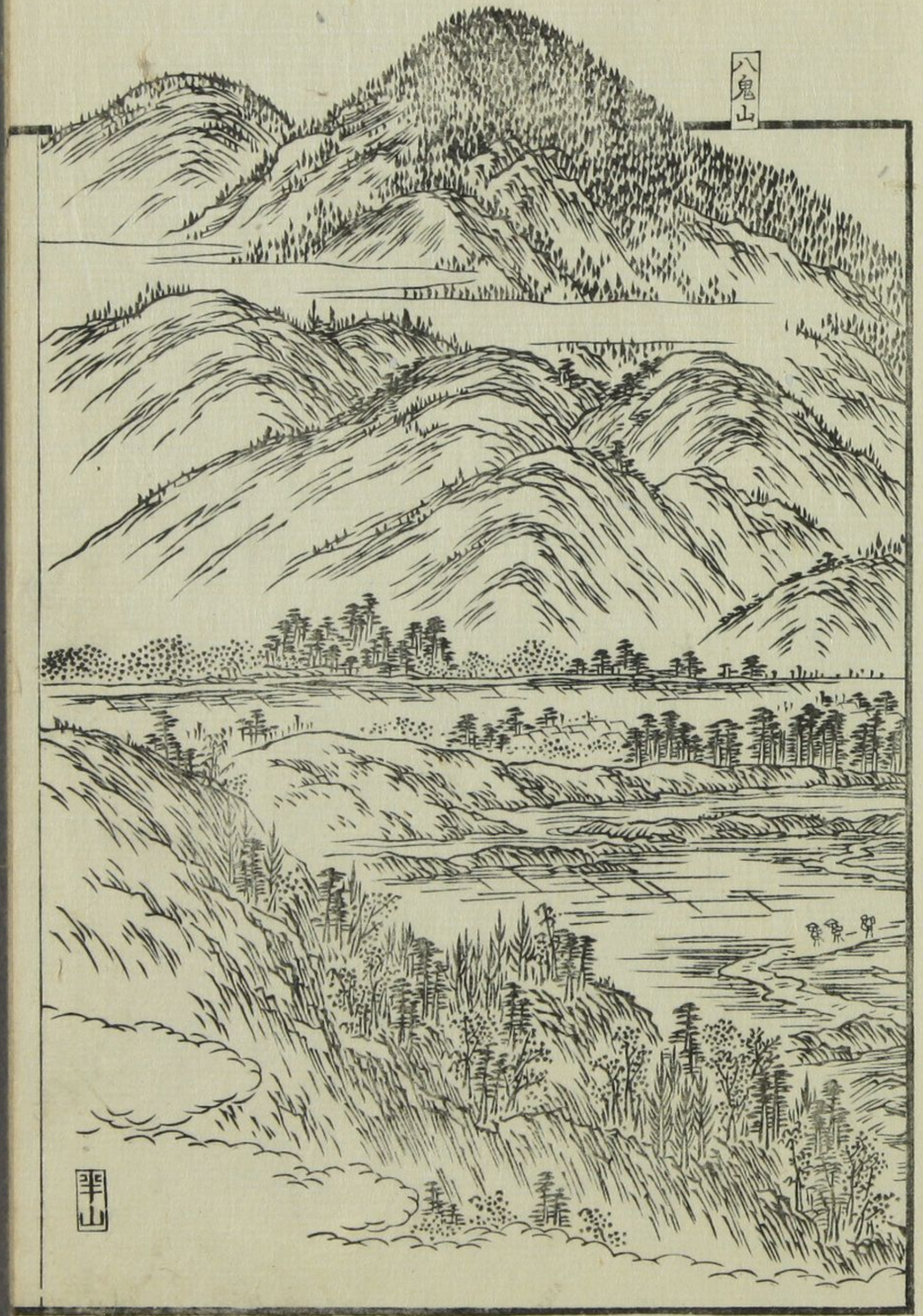
水尊ニ寶荒神 長二尺五寸 腕擅阿弥陀佛 觀世音 藥師如来 共  
 右堂より一ツツ茶所あり 饒々高上俗ハ荒神茶屋といふ 左峠ハ人家あり 此所より  
 此所より行程書あり

尾鷲より此所まで七十五丁是より二木浦へ七十五丁曾根へ二里半二木嶋へ四里  
 半新宮へ十二里半那智山へ十七里半本宮へ二十五里

二木浦 八鬼山下ニ名柄村と経て此地より二木里よりハ入海の船着して商家旅駕屋  
 又此二木の浦より曾根より一入海一里の舟より有陸路二里の山道と一里の渡り客易  
 新宮より伊勢のくさくさうららに二木島よりこのさくさく浦人の

此所より行程書あり  
 此所より行程書あり  
 此所より行程書あり





八鬼山

平山



八鬼山

八濱

尾鷲

西ノ四十五



八鬼山嶺  
荒神茶屋

麻苗や  
とくと  
むらつ付  
男あり  
屋全

麻苗の  
とくと  
樹あり  
はな  
まき



麻の吉野  
秋乃河  
涼菴

平山









又橋より西紀州牟婁郡あり故に今尚川の東英彦子神社より川の西  
牟婁子神社よりはその證ありしとて

按に延喜式神祇四籠原宮一座 大神遙宮在伊勢與志摩境山中と

今此地勢州度會郡に属しつゝも往古此籠原宮の辺にして志州の領

しも志摩の然るも此二木島まで志摩の國なりしとつゝも附合せり且楯が

崎を以て勢紀の界としつゝも疑わらるゝ志摩の國界なりしとて後人尚考ふに

**榎神坂**

或大龜坂狼坂もつゝ上下二里あり新麻村より

**徳司明神社**

新麻村の末端を街道の右の傍なり

**大吹峠**

大吹峠も彼田須村より峠に茶屋一軒あり傍に西行の松とて廣太の老松なり

**比音山清水寺**

大泊村の北十丁をり山上にあり 寺の南に下り山半腹に籠り高三十間あり有

**本尊**

千手觀世音菩薩 岩窟觀音 本堂の後より山岩窟の中

縁起云 柳南紀魚熊野大泊比音山清水寺の草創を糸女く尋る一人王五十二代

平城天皇の御宇に當つて諸國在る鬼神魔王蜂起して国土治ちや

**西行松**

宇治御首

西行の松

乃也

乃也

乃也

乃也

為経



平山



人民と殺害は是より諸國より奏聞殊に甚し泰も帝王歎れ思ひて  
坂上田村麻呂將軍の宣旨を下し勢州鈴鹿に發向りて東夷と退治し  
南蠻の惡魔を鎮めさせの今八鬼山九鬼二鬼是之然とて鬼賊も  
討まて深山幽谷に飛行し其在野に見れば此の高山に將軍是より  
登り一心に觀音の御名を唱へて三鳥帽子を着る天女忽然と  
是より南の海辺に岩屋に惡魔のれを執り行て討じ伊勢の海熊野此  
未だも大惡の弓に惡魔退ぐ我は是より大馬推現るる白馬に乗  
西天に飛入り立烏帽子を着る天女下は所也烏帽子山に申傳より將軍急  
甲冑を帶し士卒を率て教多の兵船に浮べ鬼の城廓に漕ぎせの  
跡で見りて岩覆ひて屋根あり三方に巖茂々と怪し海水磯を穿ち人便  
失く時不思儀やゆるる嶋の上童子一人り出招たり人々奇異の思  
は兵船の彼島に漕ぎせ礼拝恭敬の時童子手を奉て舞踊し軍勢  
傷け舞遊ぶ鬼神是より氣を棄れ岩屋の扉を開く所と大惡の弓

神通の矢と音故して鬼神を易く亡びり此島と魔見が嶋と申は此嶋の  
上る童子の忽ち光を放ち北嶺の雲に飛去り人則ち尋ぐ登りて見る小一丈四  
面の巖其中圓々洞穴あり紫雲空にたむびた異香四方に薰は法性無偏の淨  
境あり田村麻呂幼推し守り奉り二寸八分の筒浮檀金の千手の尊像を  
洞に納め治國平天下と祝して深く封じ其後天勅を受けて大同四年神建  
立國家鎮護の靈場之則山城國音羽山に似るがて比音山清水寺と号し鬼神の  
むろは井土村の深谷に大魔推現し崇り今世まで諸人歩くと運ぶあり其先陸奥  
にて大竹丸より鬼神を退治し天下無双の功とて此尊像の擁護しこれ二度  
結縁の輩は現世女徳とていひた者なり

金山清養寺

大泊村の北の辺にあり開基未詳  
本尊阿彌陀佛 聖德太子の作と云り

木本峠

大泊村より北にあり

清水寺觀世音遙拜所

木の本峠の半腹にあり前茶屋あり

鬼ヶ城

木の本峠の左の岬にあり清水寺の縁起より乃々峠より八見の尻船のりて見ゆ  
す下岩屋の高サ波打際より凡二丈五尺余り百畳敷の平地あり夫より又八尺



ぐらう上ニ二十疊ぐらうの平地あり右岩巖おれば上下周りもに磐石あり奇しくなり  
つらぬいし夷賊のともぐら整住し事もりりんと寛ち

魔見が島

木の木峠より左の沖の方に見ゆる巨巖三方一時清水寺の縁起に見たり

木本湊

峠と下と此地より東南とくける便宜の舟着ありて職家商家旅屋  
僧師あんと打ちしりて人家まづく建つあり萬端足りて豊饒あり

井土川

木の木の町より二丁許より海際の川とく流るる時ハ危し引以の回と  
見合せしりりりり

七里濱

木の木の町より百數十丁の間より俗に七里の御濱と云

此濱は木本の湊より新宮より街道より右の方ハ並木の松原百數十丁連り

左ハ東南の滄海渺々として白浪磯に打しせ向うに新宮の岬と見ゆると澳と

まると大舟釣ると海士の小船あとの風景言詰り絶に實に旅中第一の景地と

つに此濱辺ハ圓く碁石はくく余の石と見るとは則ち那智黒と稱するもの

おにむ大小相交り色青はりり黒はりり又清く藤の事磨と龍石と如く

其形ちりりて圓く平らるるは故に此辺の人家の庭ちりりハ此石と

多く布用ゆと風は是富國の名産として本朝名石の一なり

阿呼西巖

七里は淡井土川の向うより高凡十七八間の巨巖とて則ちニッりり此  
回ハ大馬権現系詣の道りり故に権現のニ王石とも云り

木本湊

まきののり  
木本の町ハ遊覧に  
あつひるれおたして  
おし海をちりり地  
をちりりり長大あり  
絶ちりりあつてあり  
おし海をちりり地  
をちりりりりりりり  
かゝる形言しりりりり  
街の中にあつて  
けりりりりりりり





大馬推現社

井土村の西北一里許山中より土人傳云坂上田村麻呂の祈禱所ありとぞ社の北北間より高サ一丁なり。街道の右の山の方

花之窟

七里谷の内有馬村より街道の右の傍有馬村の入口標石ありて石の鳥居燈籠臺巖の窟の高凡廿五間周廻凡二十許此巖の前玉垣ありて正中幣を懸り

此窟日本紀所謂伊弉册尊と葬る奉りて所ありとぞ例年此巨巖の上より濱松の梢に注連繩を引りて繩を以て旗を作り是は伊弉册尊の祭礼に二月十日廿日

して神官より村中の男女花を備へて岳の嶺に是神代に此風を故に花の窟のつらじと窟と稱せらるる岩窟の類ひより只高廿四五丈

むらりの巨巖あり按に巖岩同字して磐庵の中畧あり然る岩と磐岩と巖と大なる磐とするは非あり又穴居する窟といふ石の窟と巖との其深く通

むると洞といふ和漢ニオされ此花の窟は木の類ひより大磐石とのべたもの然るも此地に神の鎮より是より則ち此磐を以て御屋と崇むれば磐屋と

日本紀曰 伊弉册尊生火神時被灼而神去矣故葬於紀伊國熊野有馬村

焉土俗祭此神之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭

稱とるらん又別窟の口よりもあは

西一ノ五十一

伊弉册尊生火神時被灼而神去矣故葬於紀伊國熊野有馬村焉土俗祭此神之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭

稱とるらん又別窟の口よりもあは

矣

右有馬村ハ則當地

久妻花 紀小やある村より神のま向る花はあはれとせかり 公法

夫木 神をよむの時にやかぬらんある村から流るる 光俊

同 春風を指しぬくはよや有馬村より神よりせよ よし人あはれ

みらりの御漢にふるむる花の窟をたれどもあはれ 西行

王子岩屋

花の岩屋不敷し是も巖の前玉垣と結び内幣を懸り此呀ハ神輿遇安智と葬る地云伊弉册尊化去る時伊弉諾尊十握の劍を以て斬愚安智と斬りて日本紀に見る

日本紀曰至於大神輿愚安智之生也其母伊弉册尊見焦而化去于時

伊弉諾尊恨之曰唯以一兒替我愛之妹者手則匍匐頭邊匍匐脚邊而

哭泣涕焉其淚墮而為神是即畝丘樹下所居之神號啼澤女傘矣遂按

所帶十握劍斬輿愚安智為三段此各化成神也云

有馬浦

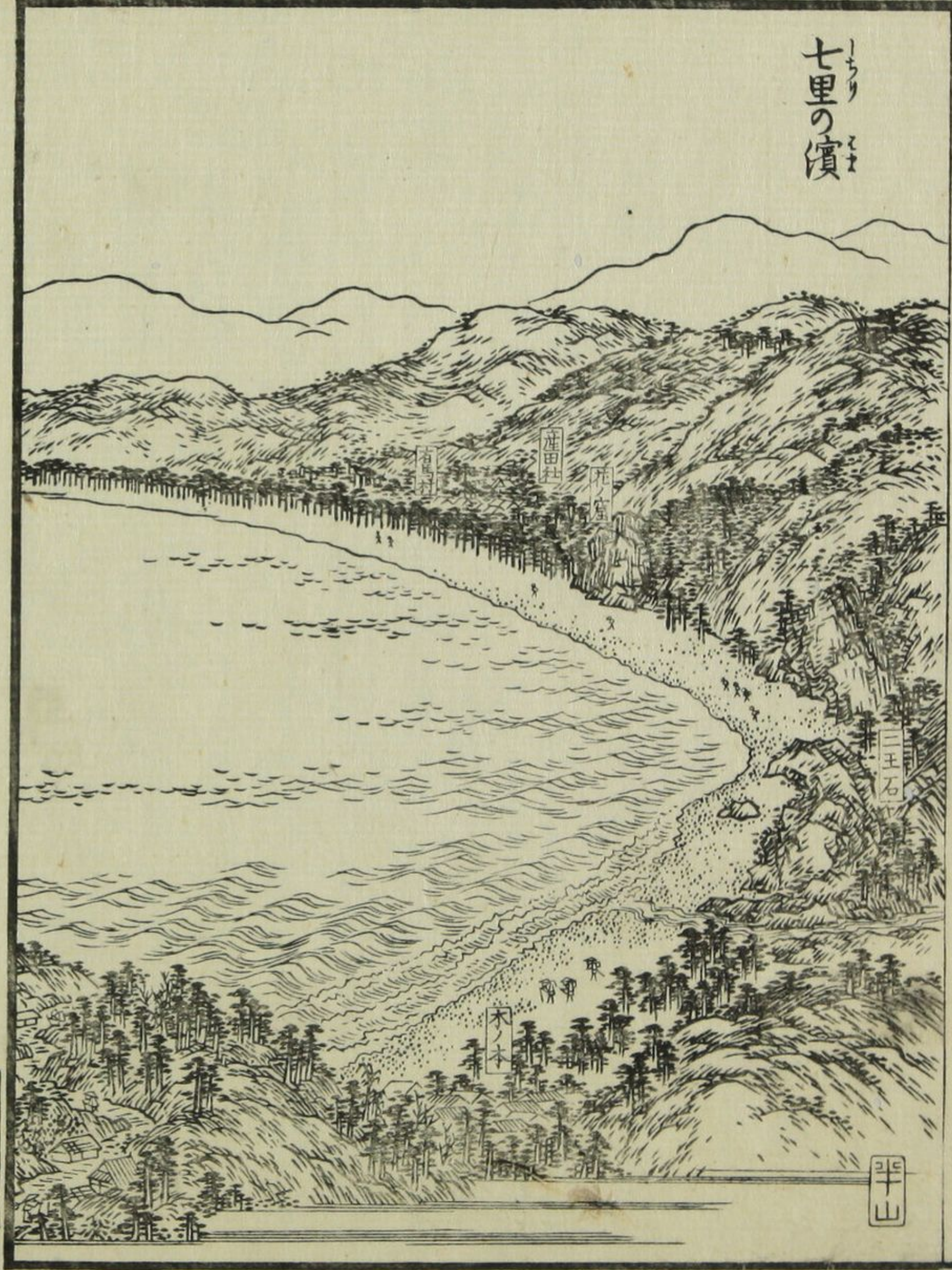
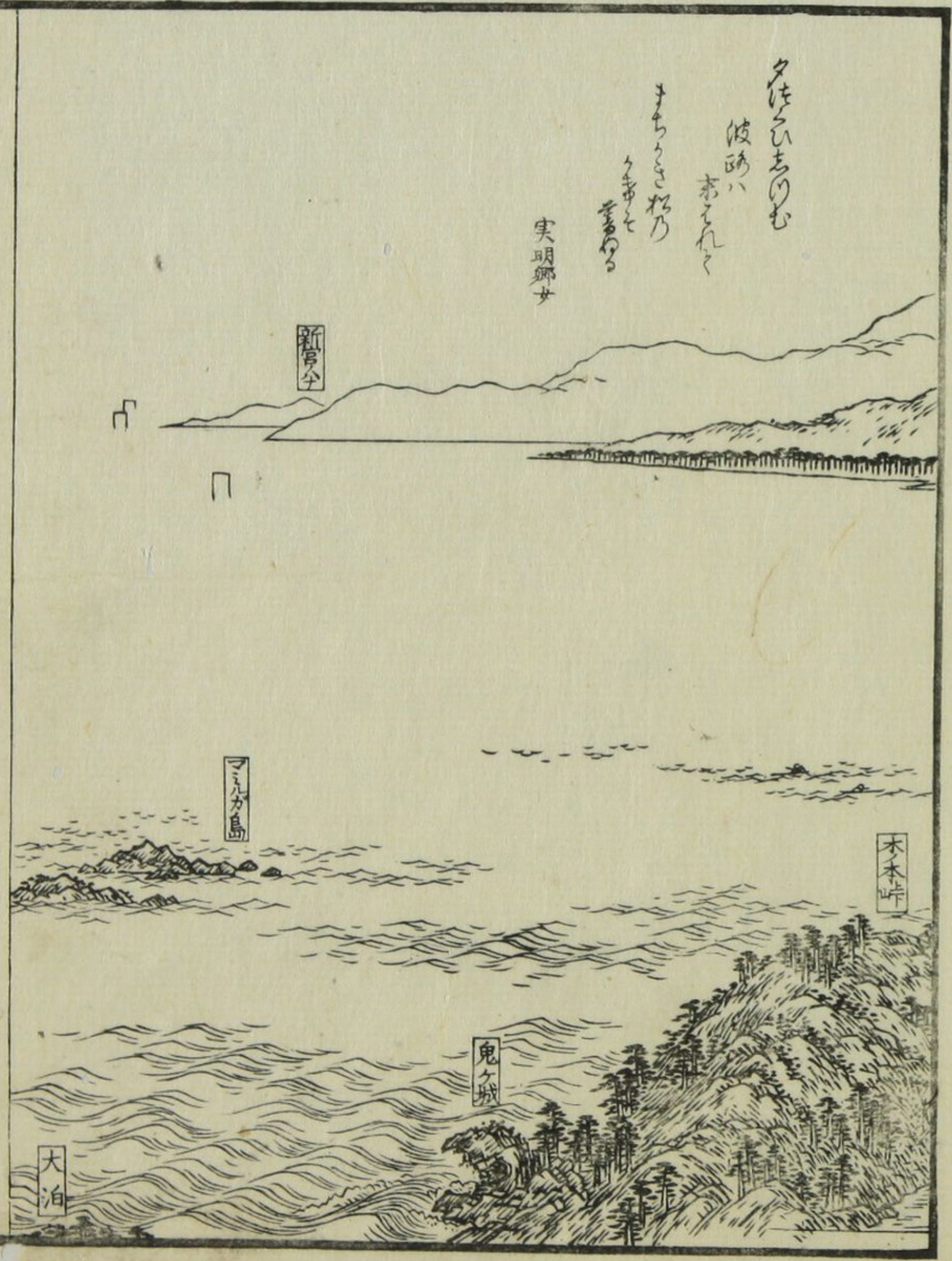
同呀の浦といふ

家集 有馬浦の浦内につらと本條もあはれ

玄特ニ蔵祠 聖徳太子祠

とも有馬村街道の左傍森の中より未由未詳 増基法師







花之窟  
 王子之窟  
 有馬村  
 産田神社

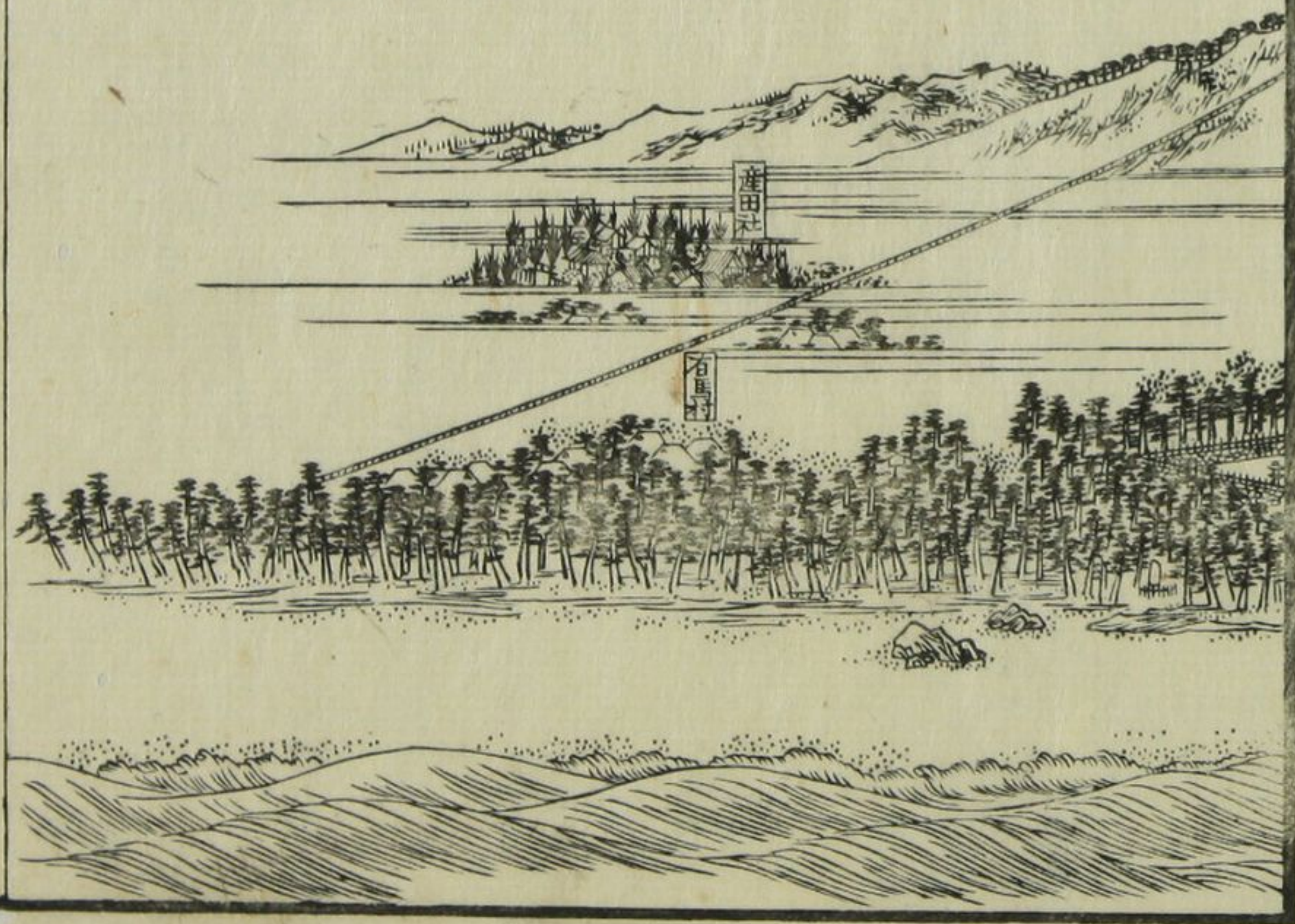


西ノ五十三

なむむ神見  
 三浦の海  
 宗良  
 波は優り

喜これハ  
 花の窟  
 紀人のまろ  
 みる神見神

賀茂去脚





産田神社 有馬村花の岩屋より十丁を西へ

本社 祭神 二座 伊弉諾尊 伊弉册尊

拜殿 中門 大鳥居 大鳥居より中門の間其余すべて大木の枝の挿あり

日本紀曰此二神青檀城根尊之子也

青檀城根尊八天神第六の陰神惶根尊の御事之入の御名吾屋惶根尊又忌檀城尊

長生山安樂寺 産田の神社の東へ禪宗之開基八周防國電文寺大菴和尚開

東安寺 有馬村の西南十二丁許より真言宗之傳三二位の禪尼創建あり

志原川 有馬村より十丁を往て右本宮の御道左の御道あり

市木村 有馬村一里より此所より

阿田和村 市木より

井田村 阿田和より一里

湊川 阿田和村より此川も云是も瀧と歩行を渡る

水傳ノ磯 街道の左へ入て鶴殿村の東南二十丁を往て土人水する磯あり

夫木

あつた磯の浦は乃志はじとく

畧解入水傳六枕詞ありと有紀路奇枕抄南紀名勝畧誌 紀路名所記あり

握々鼻王子古趾 井田村より成川村より街道の左より

耳切川 成川の前より阿田和より井田より夫より宇和野鳴川より

熊野川 新宮城下の口より水源和州吉野より出る又本宮音無川岩田川村の流會

又此河より上り船あり本宮より舟路九里八丁兩岸十々絶景あり然れども那智山より

借の筆順路の勝手より陸路を行く又内より高野山より果敢と越て本宮小

来る者本宮より舟より當新宮下より余と那智山より二番紀と井田より和野山より

新古今 熊野川より

紫雲和野 熊野川より

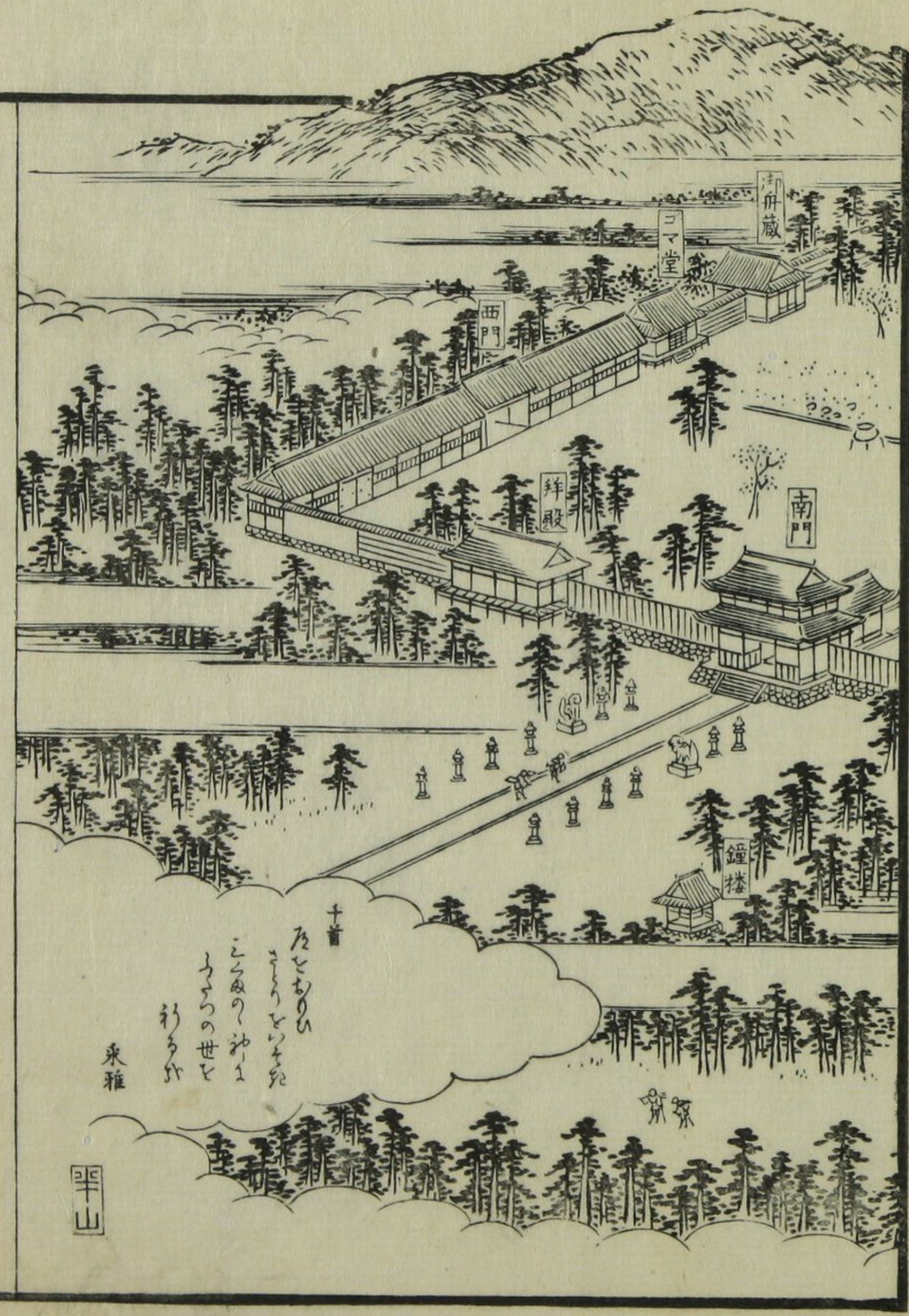
續古今 熊野川より

熊野新宮 熊野川を越て右の方より門前新宮の町家之下馬河の傍、席師の館あり

本社 速玉男尊 正面の後より奥の社とも称する 紀路名所記云三神殿あり

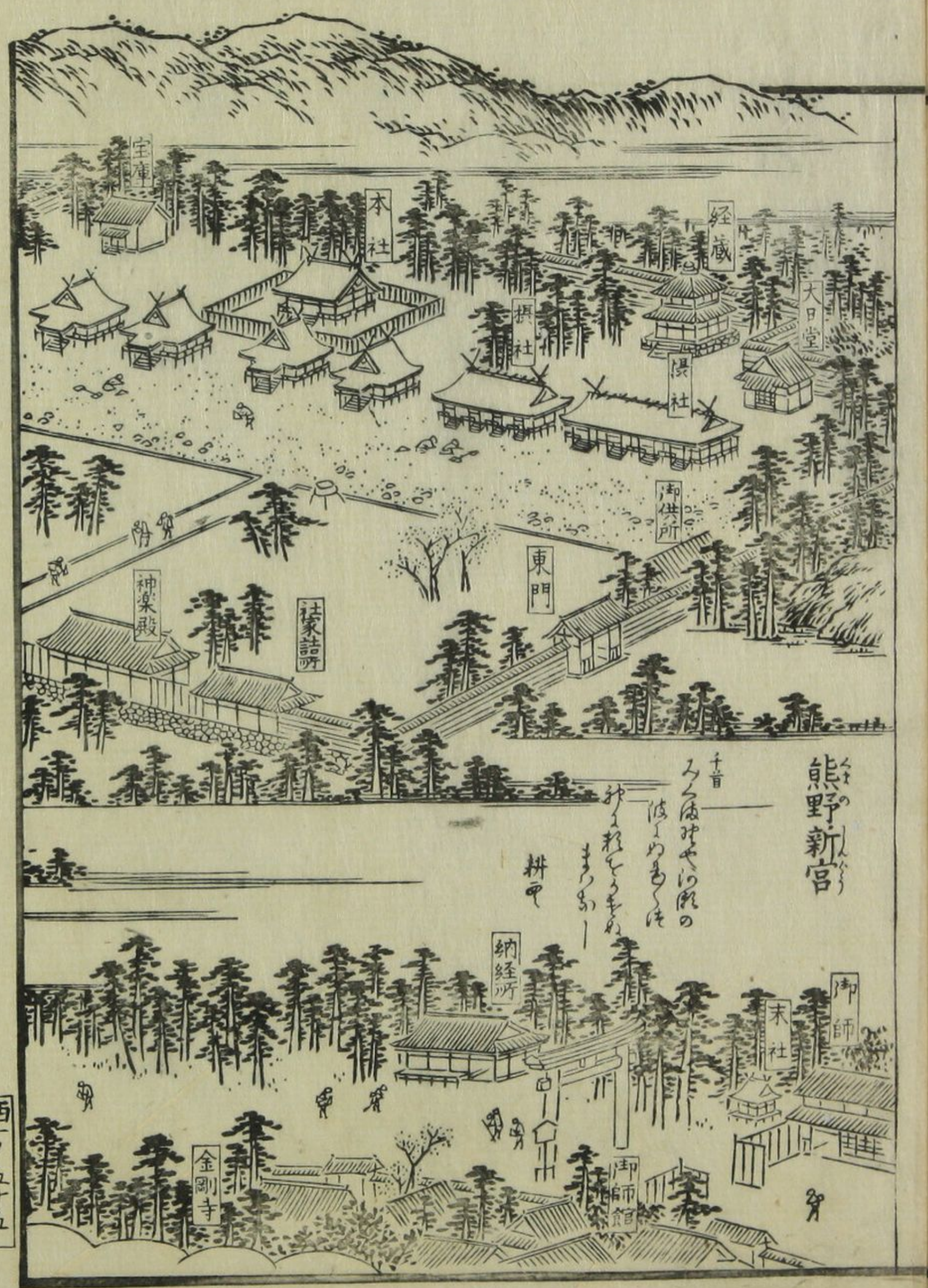
熊野名所圖會、本社速玉男尊あり





十首  
 及とあひ  
 さうとをいそ  
 こゝの世と  
 行ふは  
 来雅

平山



熊野新宮

十首  
 りんぼくやの  
 波のよも  
 せうとをい  
 まうは  
 耕甲

西ノ五十五



- 西より
- 第一 伊弉册尊 第二 伊弉諾尊
- 第三 國常立尊 第四 天照皇太神

攝社八座 但九神神殿一棟一列

禪地宮 天忍穗耳尊 聖之宮 瓊々杵尊 兎之宮 彦火々出見尊

子守宮 鷓鴣草普不合尊 十萬宮 豐斟停尊 一萬宮 國技槌尊

勸請宮 泥土者尊 飛行宮 大戸道尊 米持宮 面足尊

右十萬宮一萬宮二座相殿あり故一八座

御船庫 本社の右の傍 寶庫 御舟蔵の右隣 拜殿 樓門の西

輪蔵 攝社の後 大日堂 輪蔵 御供殿 東御門の傍 神樂殿 樓門の左

樓門 本社の正面 鐘樓 樓門の外 大鳥居 惣門下馬所の内より

當宮八人皇十二代景行天皇五十八年の創建 本宮一後より六百六十

七年及びつり延喜式神名帳に熊野早玉神社とあり 則ち當新宮の事なり

例祭九月十五日飛鳥明神の祭礼同日にて飛鳥の神輿と錦の袋衣入

奉る権現の神輿と一時船に乗奉り御船島の行宮に神幸し奉るるの時川口は船  
 數十艘渡御と供奉しおのく祝一個の麻舟に乗て從し祝島の上よりつて諸船  
 りつて下つて川口返り奇と廻り會し酒宴催り例と是則ち舊史に  
 所謂神と祭るの目花と挿し鼓吹せし其遺俗ありと又十津川の五十木鎗と  
 いる者鉄炮と携へ神輿と供奉する先例の是斯て翌十六日還幸あり  
 本宮社家舊記曰新宮者景行帝五十七丁卯歲以勸請本宮之神及天神  
 地祇十二代神靈於御氣山依為新地奉号新宮云々 名勝畧記

熊野新宮にて

玉葉 天降る神や忍いしる志の湊いしちちと此にそ 中京師光

後鳥羽院熊野所幸之時新宮御會和奇 庭上冬菊 海辺冬月

拾遺草 秋乃去る 定家

わらわしひの天のあはれもわらわし月終 全

新山御旅所 本社の西北五丁許より神馬あり毎年九月十五日祭礼の時速王男神馬を騎て此所  
 来りて又神輿あり九月十二日祭礼の時速解男神神輿に乗て此所来りて云々



御船島

本社の西北二十許あり例祭神事とりに遷り

源塩

二熊野此浦より見ゆ御船島神の御幸に漕出あり

少将内侍

家集

そこの形はなま押さえて御船島神れより小あつと見え

増基法師

牛鼻神社

御船島より二十許川下山の軒取らう此地は相野の庄難田村より

如法堂

本社より西北二十許あり有峯寺と号し慈覚大師の岡基より新宮の神宮寺

新宮城

新宮の社頭の東海辺にあり  
紀伊公の御家臣水野殿の居城あり

熊野遊記云此城故新宮十良義盛の居す所一係る義盛と係判官為義乃

本予子あり治承四年高倉宮既一平氏と討の謀ありてひそかに令旨を齎ら

関東に降りし心則ち義盛を以て使ひ既して那智新宮の諸郡稍く

義盛に附者あり是より先本宮大保大江某者平氏の為に祈禳乃

事と掌る既義盛隠謀ありと聞ら自ら兵三千人を率ひて船に渡り直小

新宮城に抵る攻むと急あり拔すて敗走大江氏の族は佐野法橋より者あり

従て又敗して山中に竄れ密に人々と書と持じ状と平氏乃福原告言是

新宮湊

新宮の町より東十町許あり朝夕高舟出入と文易一頗る繁花の濱

憲淳僧正熊野山入堂記

兼舟到新宮湊

渡口宿時望地形 幽奇旁似畫圖屏 沙塘岸遠漁村白

松樹山高鳥路青 帰浴老季拋刷勢 行舟曉燭輝残星

一留一去春天旅 霞色潮聲入視聽

由て高倉宮の事遂に露る義盛後源大將軍に事謀及て家滅ふ兵家

茶話に載り堀内氏善者者世に紀州の人なり其先熊野別當湛静に出ると言ふ

豊臣氏の時一族を以て致し新宮城に據り固守以後豊臣氏と和し納れ是臣より

慶長甲子の乱に石田三成等々逆謀と興し國除せらるる慶長中浅野氏

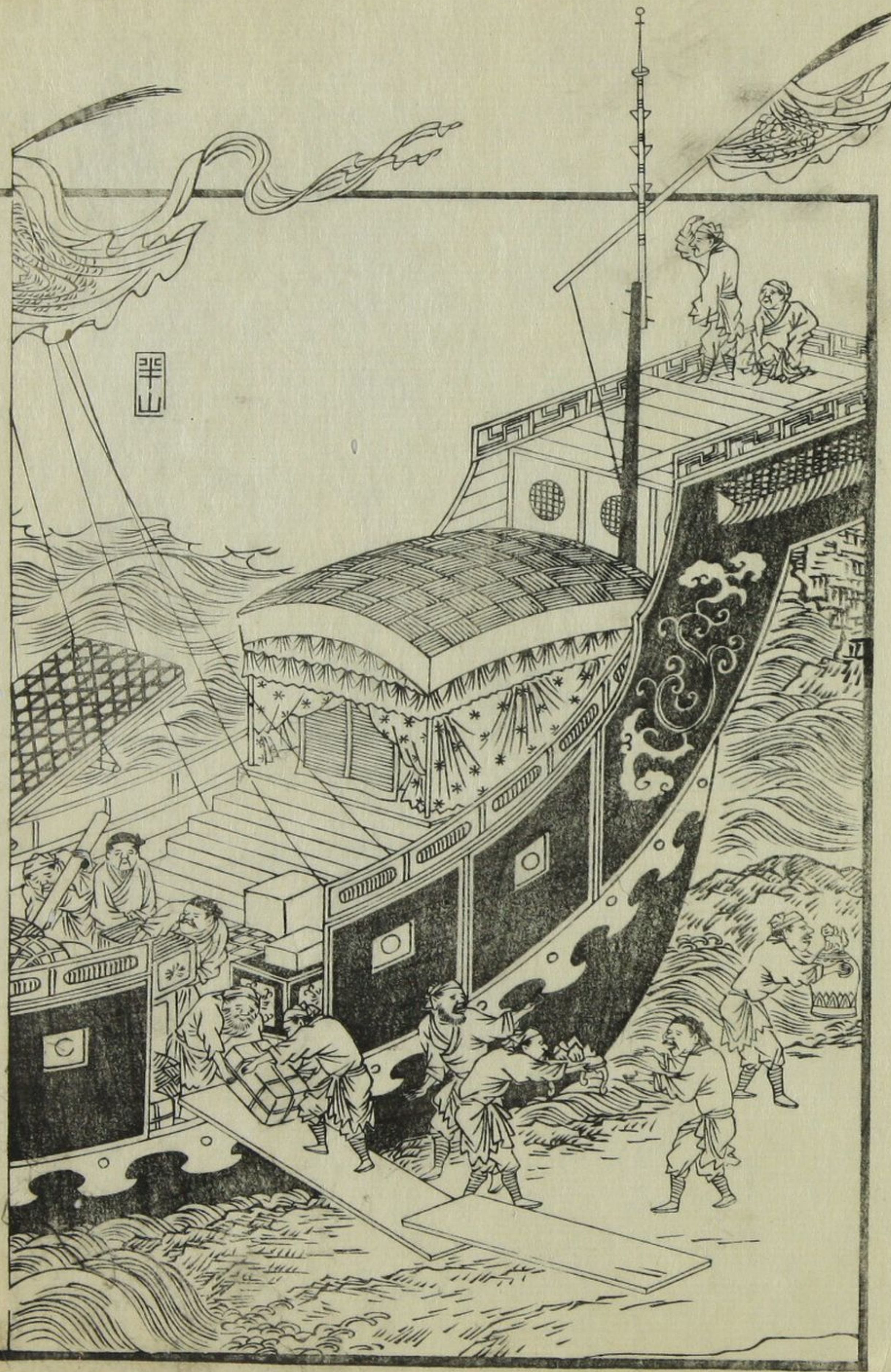
家宰浅野右近より居元和五年よりて今の城守とありと云

當城下新宮権現とあり靈地多く殊更運送便宜の湊なり故に高家子家

軒とあり賑ひて万端の地と来つて調ひつるものほこれ其繁花の濱

とて熊野中無雙の一都會あり





平山

本朝通紀  
 入皇第七  
 孝靈天皇七十  
 二年秦徐福來朝  
 時始皇好仙術東遊海上  
 於是使方士徐福將童男  
 女千人入海求蓬萊神  
 不死之藥徐福來朝遂  
 不得其藥畏誅不敢還  
 在熊野卒子孫皆曰秦  
 氏



西一ノ五十八



矢倉明神社 新宮村の祖神ト云 八幡宮 同上榎木氏の祖神ト云

丹鶴山東仙寺 新宮村、いり真言宗傳云六條判官為義の息女鳥居の禪尼の建修、  
本尊阿弥陀佛、藥師觀音と安んじ、弘法大師の作ト云  
接六條判官為義の女、鶴原とて熊野別當彩真の妻あり、老後剃髮して鳥居の禪尼と号せ

無量壽寺 右同村、いり禪宗、いり比丘尼寺、之、岡基詳あり、本尊阿弥陀佛、脇士  
觀音勢至の兩像、之、行基の作ト云、什物法灯、国師の画像、賛、法灯の自筆ト  
言、佛涅槃の画像、唐画の、筆者不知

東陽山宗應禪寺 同村の西南、丁半、余、いり禪宗、いり曹洞の古刹あり、岡山、三州、最勝禪  
院、秀山和尚、其創、杏林禪寺と号、殿堂、櫻々、いり後世、廢、  
慶長中時、領主、淺野侯、嗣子、不幸、短命、いり、廢、いり、寺中、茶室、塔、其上、建、  
法詳、之、岡基、宗應、居士、号、斯、此、寺、の、岡基、香林、改、宗應、禪寺、と、号、之、寺、富山、の、縁起、見、  
本尊、釈迦牟尼佛、惠心僧都、作、佛涅槃之像、達磨大師、画像、聖德太子、木像、并、画傳、  
細、廿五條、の、袈裟、琥珀、の、念珠、ホの、什物、いり、尚、此、余、聖、宝、聖、之、

仙養山燈明寺 同村の、迎社、の、境内、いり天台宗、岡基、詳あり、  
の、画像、三幅、對、菅相、丞、の、画像、自筆、の、一、役、小角、の、画像、自筆、ト云、大黒天、の、木像、并、公孫、  
假面、の、春日、作法、華經、弘法、大師、の、筆、ト云、  
秦徐福墳 新宮の鳥居、凡、廿六、丁、許、東上、熊野地、村、飛鳥、社、り、五丁、いり、西南、いり、  
南紀名勝畧記云徐福祠新宮庄熊野村の西南にあり今祠に土人其とてと捕殺する  
順礼細見記云新宮の下馬、十六丁、東徐福祠、いり、世俗、蓬萊山、と、いり、いり、此、好、  
いり、言、いり、いり、

熊の浦辺に秦の徐福塚とていり

秦の始皇帝徐福とて海中に神薬を求めむ徐福数年を経ても曾て求

蝶菱

得ば費頗る多し、始皇の諫ん、いり、思、ま、て、乃、ち、詐、曰、臣、海、中、に、於、て、神、  
見、お、の、言、て、曰、汝、西、皇、の、使、る、武、汝、何、と、求、む、答、曰、年、と、延、壽、と、益、以、藥、  
續、いり、願、ふ、神、曰、汝、秦、王、の、禮、薄、故、觀、之、取、之、得、ば、即、ち、臣、と、從、  
東南の方蓬萊山、いり、宮、闕、を、見、る、使、る、者、り、銅、色、ト、龍、の、形、光、り、と、  
天、照、り、是、いり、て、臣、再、拜、いり、問、曰、何、と、資、り、り、て、獻、る、と、海、神、の、曰、名、は、男、子、  
若、く、振、女、百、工、の、事、と、以、て、即、是、と、得、ん、と、秦、始、皇、是、と、聞、て、大、に、悦、び、て、振、男、女、二、  
千人、と、て、是、いり、五、穀、の、種、と、百、工、と、資、り、り、て、行、む、ト、  
史記大意本記、八、徐、市、  
列傳、六、徐、福、と、いり、  
熊野名勝畧圖云徐福歸化、人、皇、七、代、孝、靈、帝、六、年、也、ト云、後、漢、書、東、夷、傳、據、  
の、本、朝、沙、門、中、津、絶、海、と、号、いり、明、入、太、祖、徐、福、の、事、と、同、答、る、詩、と、以、て、曰、

熊野峯前徐福祠 満山藥草雨餘肥  
祇今海上波濤穩 萬里好風須早帰



大祖和曰 熊野峯前血食祠 松根琥珀也應肥

昔時徐福求仙藥 直到如今竟不歸

日本王代一覽曰 人王七代孝靈天皇 此代異朝して八秦の始皇の時、當て

徐福といふ者蓬萊山不死の藥を請んとて日本に渡りて

飛鳥神社 新宮の在上熊野村にあり新宮の町より十丁許東に

本社 祭神 大宮姫命 或云速王尊也又東の一社、新宮の地主と勧請す云

徐福祠 本社の傍にあり

宮戸神社 中熊野村の東北二丁許川辺にあり俗に蓬萊山と云祭神 泉守通神ありと云

行家館古趾 下熊野村にあり新宮十郎義盛の居りて蔵人行家と号し高倉宮御謙殿の時、今上旨の御使と勤むる盛衰記を見たり。宮戸より彼の王子行道の左に

源平盛衰記高倉宮令旨使節之條云

抑令旨の御使誰と勤むれば仰られ二位入道申りて外人憚りて新宮十

郎義盛折節在京侍と召さるる使節と仰含めりて之に可然と云

義盛と召し事の次第を云々下知せられも六十郎畏りて平治年中

より新宮に隠き籠りて夜晝安んじ心おろして素懐とてげてふと云

家門の耻と清めんと存する所は今嚴命と當り條然とあがり身の幸ひ侍

一門たれ子細と申さる速に東國に罷下りて同姓の源氏平末の家人と催

上を候ふごとく御前と立ちあはれに二位入道申りて令旨の御使と勤候

ふんは無官とて其恐れ有りと申せば然りとて當座に蔵人にあはれんを

十郎蔵人の義盛と改名して行家と名乗九日令旨と給て十日の夜半に

藤笈と肩にけ柿の衣を装束して熊野まで見習ひしれ山伏のまじひ候

して海道に係つて下りたり云々

十郎蔵人東國下向の時内々新宮へ申し下りる事平家へ悪行年積り

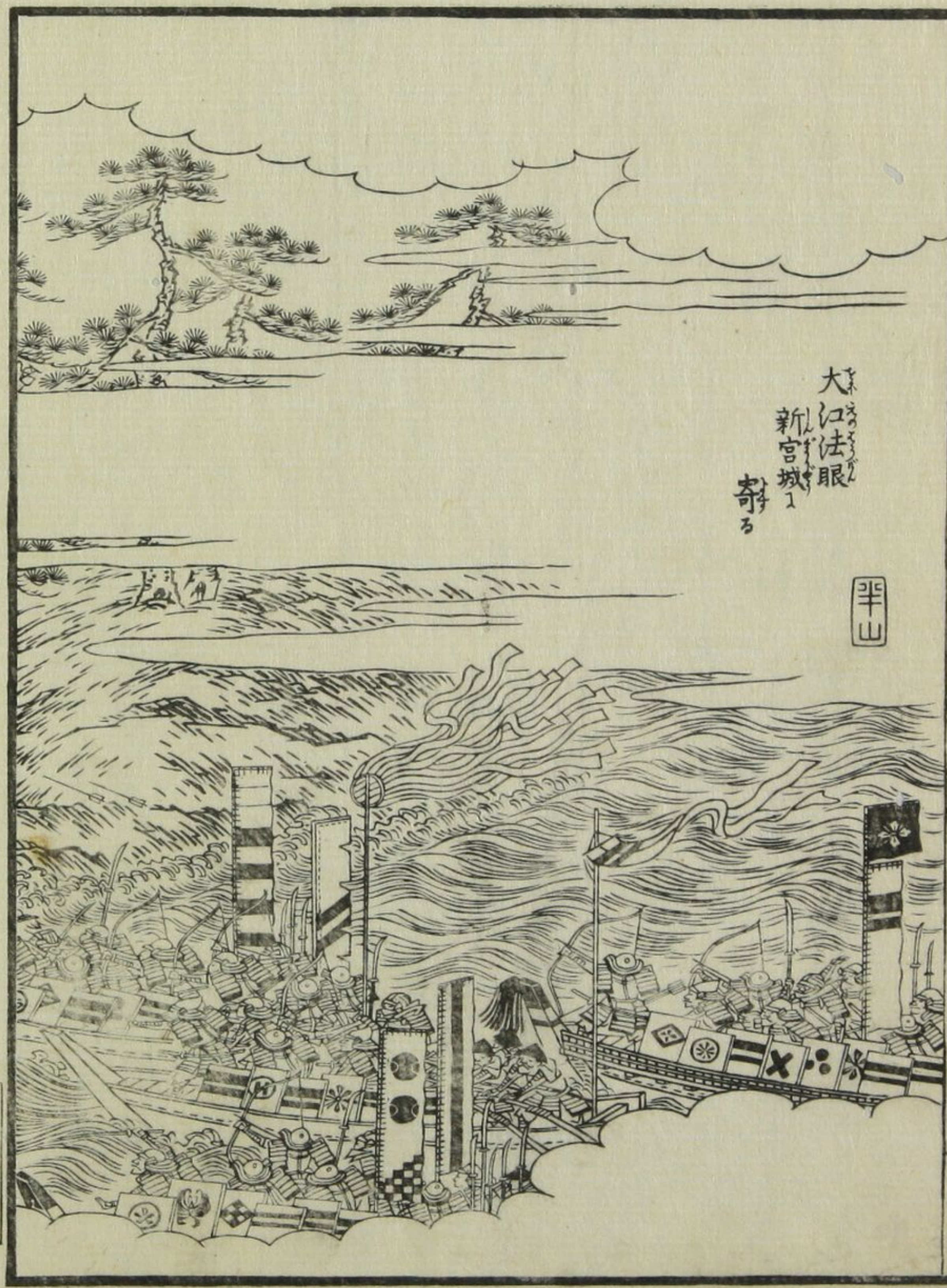
法皇と鳥羽の御所へ押籠奉りて忽ち逆臣とあるに依て彼輩追討せら

り官の令旨とて同姓の源氏平末の家人と催促の爲に關東下向に

早く家人等と相觸りて内々用意して行家が上洛と相待べりと云下りて

れば那智新宮の者も寄合ひ隠し私語を國內通計の事なれば

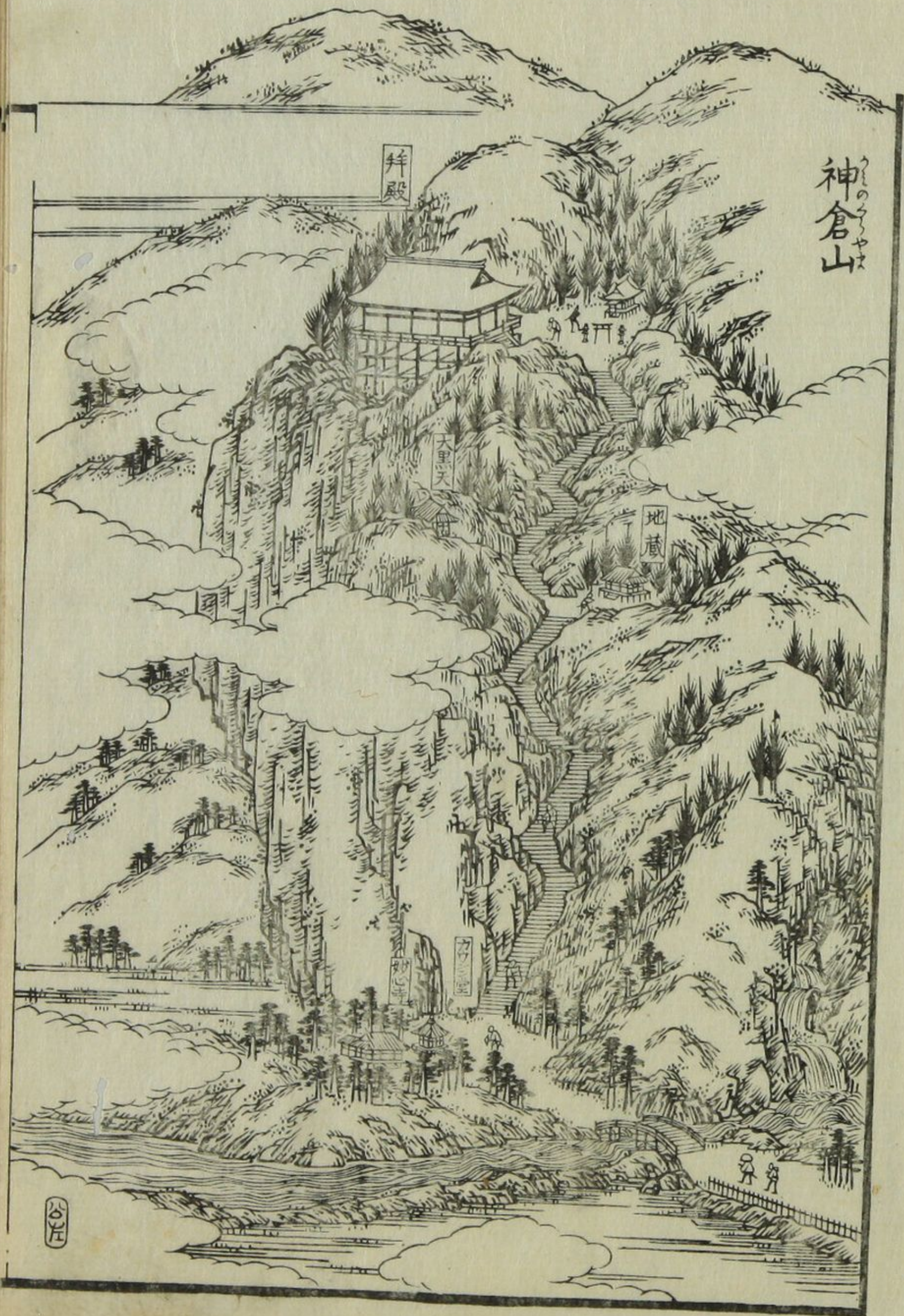




大江法眼  
新宮城  
奇

半山





平家の初師本宮大江法眼あれとき新宮十郎義盛あそ高倉宮に令  
 旨より東國より白旗白弓袋にありけり平家と亡ぶる事ありけり那智  
 新宮大衆等源氏の方人せんと用意有れりや推寄成がんとて大江法眼と  
 大將軍とて二千余騎舟に乗て新宮の浦押せり新宮那智の大衆の事と  
 聞て那智の執行正寺司権寺司羅睺羅法橋高坊の法眼等同心して大衆千  
 余人新宮の浦陣とて大江法眼押せて互ひし時と作る事之箇度二月の  
 鑄矢鳴やむ事とて太刀長刀のひりり影雷のど源氏の方より用とて切れ平家此  
 方より射とて軍とて六種震動のど互ひし半時も退る一日夜火乃  
 出るやとて戦いこれども大江法眼軍は負け相詰り輩遁る者少く討  
 者多し那智新宮の大衆軍は勝て貝鐘とるに平家の運頗き源氏  
 警昌のど軍始め神軍して勝り悦びの時二度までとて造られり  
 濱王子社 下熊野村の南二十許あり宮戸の社より十丁あり濱辺の方村の内  
 社の東南辺に頓宮の跡あり熊野九十九王子の内  
 玉之井橋 官戸の社と後の王子との間あり或玉之江の橋と云



南紀名勝畧誌曰新宮の庄に上熊野村中熊野村下熊野村あり今の新宮はもと  
つも原八熊野村の内なるも新宮大神鎮座の以後所の名をせり諸書に熊野  
村とつて此所あり

神倉山権現社 新宮の町の半途より氣清の通り凡新宮の社頭より十五丁許を山手と  
當山麓所より申の刻に限りて登山し禁原谷に新宮の奥の院と云

本社祭神 天照皇太神 高倉下令 或龍巖権現社并觀音愛染の  
西尊と安ん

額曰 日本第一熊野根本神藏權現

大黒堂 山路の半傍より 地蔵堂 同坂の傍より

石不動 自然石の盤石 袈裟衣石 堅横筋のり色 地獄谷 餓鬼水 阿伽水

小山中より本社六回五回して巽に向い山腹の磐石を以て神座と其前  
建架る棧造りあり此欄より近く臨み新宮の城下の街衢縦横あり  
遠く東南の滄海一望して絶景あり

相傳神藏山大古神武帝の御時武甕雷神節靈の寶釵を下りたり  
高倉下令の庫の古趾あり故に神倉と号いど本々日本紀に見たり

日本紀曰時彼處有人号曰熊野高倉下云云時武甕雷神登謂高倉曰

予釵号曰節靈今當置汝庫裏宜取而獻之天孫高倉曰唯唯而寤之

明且依夢中教開庫視之果有落釵倒立於庫底板即取以進之云々

舊事記云天照國照彦天火明櫛玉鏡速日尊兒天香詔山命 天降名乎  
栗形命

亦名 高倉下令 此命隨御祖天孫尊自天降坐於紀伊國熊野邑云云

熊野にまゝてゆるる村かんのくろくそと古久大後一位

續志 二熊野や神倉山の石たふさむも物のはう那 常盤井  
入通前太政大臣

妙心寺 神藏山石階の下より真言宗法燈國師開基の法燈の木像有り自作の  
鉢杖草鞋の法燈所持ト云古より比丘尼住持来るより尼寺と云

庚申堂 青面金剛童子と安ん 妙心寺の前より

二熊野 又御熊野も熊野遊記曰有云山曰本宮也新宮也那智也是曰二熊野  
方より或云尊神鎮座の地あり以て熊野と稱すも俗伊勢と稱伊勢と云  
是も向く熊野中の浦の事にて何れも限るに有る凡土人曰凡擲寺の

二熊野浦 是も向く熊野中の浦の事にて何れも限るに有る凡土人曰凡擲寺の

奇挑抄曰仙覺抄云二熊野に浦の濱あり續るハ伊勢國ありとの説あり

二熊野に濱あり續る奇と集りて伊勢の名所たりて本づく此説あり







名寄

こ熊野の漢中入るやみぬ行の哉きくをていひまわらん

俊頼

夫木

みらほれ初の本とかぞいまに我なりし時浦の漢中入

雅経

建御幸

子代とてゆく月とてこ熊野の浦の漢中入るやみぬ行

内大臣通親

同

人もいふあはれ月とてこ熊野の浦の漢中入るやみぬ行

推中納言公経

同

こ熊野の浦の漢中入るやみぬ行の月

藤原長房

詞花

我うつしと人ともぬのうとていふやみぬ行の月

和泉式部

新古今

こ熊野の浦の漢中入るやみぬ行の月

伊勢

新勅撰

こ熊野の浦の漢中入るやみぬ行の月

七条院大納言

風雅

おもしろい月とてこ熊野の浦の漢中入るやみぬ行

建礼門院  
右京大夫

新拾遺

海士小船の月とてこ熊野の浦の漢中入るやみぬ行

薄壁門院良馬

建御幸

わ田の系流の月とてこ熊野の漢中入るやみぬ行の月

入道前大臣

こ熊野の漢中入るやみぬ行の月

尚古詠多一巻之

入道前大臣

同

月づげのこりまのつとてこ熊野の漢中入るやみぬ行の月

藤原範光

御手洗坂

新官の城下より半里許に廣津野村に至り此坂路の山崎の崎は天狗の鹽とて大石

同

御手洗坂の岩窟の通にこれこれ其項権現は東浦の徒の海邊に御手洗の身と清也

又此坂の頂上より

又此坂の頂上より望むとて此坂の崎とて望むとて其風景言語に絶れ

上野明神社

上野妻島の嶋とて大地の崎とて望むとて其風景言語に絶れ

三輪ヶ崎

御手洗坂より五丁許を経て此浦里に新官の行程一里の場所なり

紀路奇枕抄曰此名所諸書に紀伊國に出づ然も私の手簡を以てあつて

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

同

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

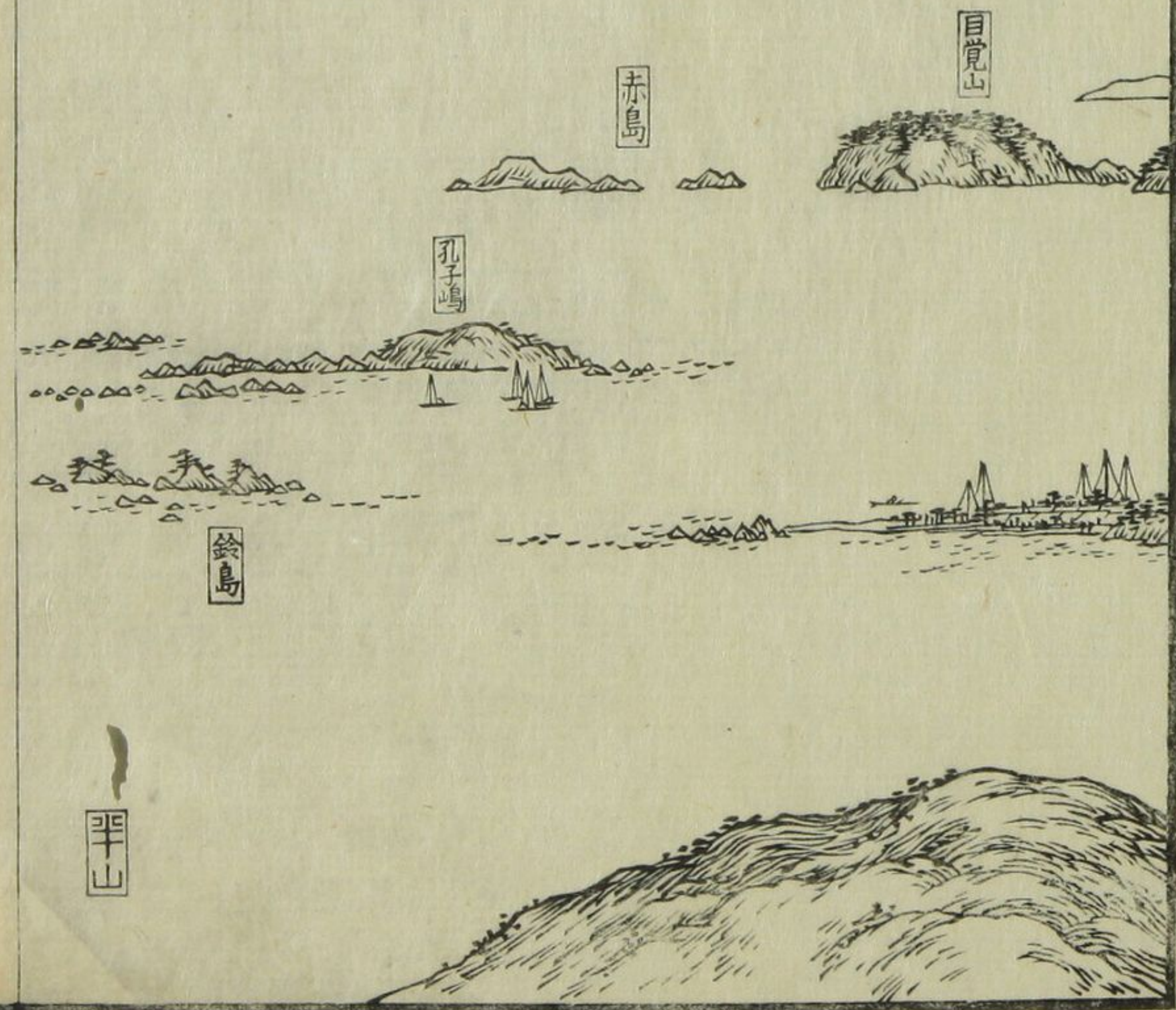
三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月

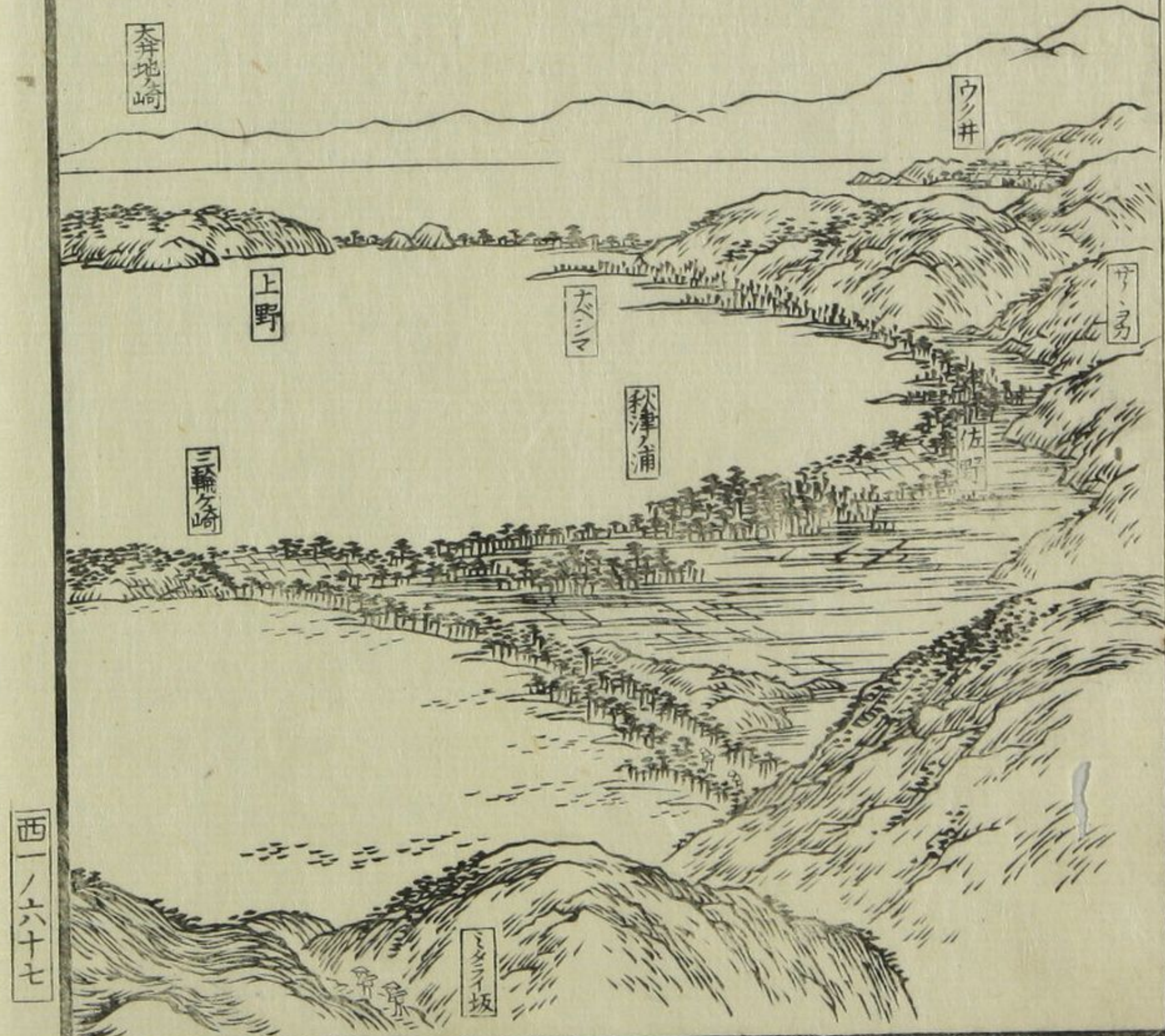
三輪ヶ崎の浦の漢中入るやみぬ行の月



付る  
 赤島  
 三輪ヶ崎  
 平山  
 山口故榭



三輪ヶ崎  
 佐野



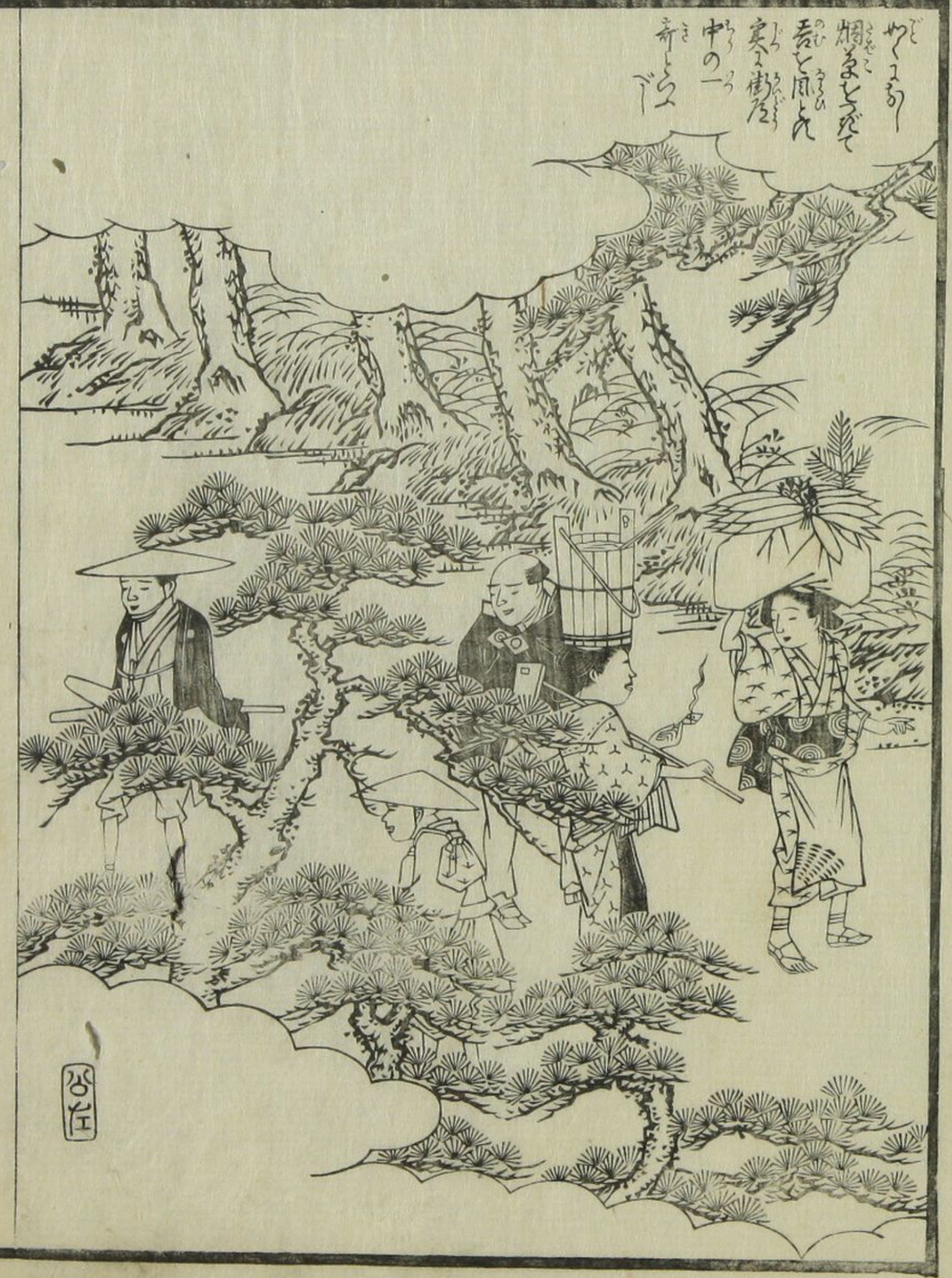


佐野松原

佐野の松原  
 前上材木とたいて  
 又煮け桶桶といふは  
 坂崎のものといふは  
 農事と兼し海師の事あり  
 又といふはてすふいふ  
 つまもも報載つた  
 巧み又此地の男女  
 とも小煙草  
 どのじよ  
 煙草の  
 用は  
 榎木  
 榎木  
 人敷の



佐野  
 相まとうぞ  
 奇と  
 中の一  
 奇と













平惟盛、屋島と家一志のひ出高野  
 山におて出家一名と戒法房と改め  
 の御供一奉一重景もとも一出家  
 戒實とつらと石童九もひ一剃髪  
 して戒圓と号し主従二個もは熊野の  
 浦へ入水一舎人武里、御遺言のりて  
 存命、素内一系、時頼へ道へ高野山に  
 坂庵やと一開。



平山



西ノ七十一



元曆元年二月廿八日生年二十七と書ゆい奥一首と遺されり

中をて入修し死て入るものをも定めおとせし定りりり

其後又鳥より船を移すのり送の沖に漕出のひね思ひ切る道なれと今と限りの

浪の上こそ心細うりもめ二月の末の事おれば春も既暮ぬ海上くも霞

籠り浦路の山も幽うり沖の釣舟の波の底に浮沈むと見ゆりも我身の上こそ

おもひれりる帰雁の雲井の余所一撃二声音信と聞ゆいても故郷一言傳せ

けし思ひをりま

改曆雜事記曰後鳥羽院御宇元曆元年二月廿八日權亮少將維盛於那智

浦入水歌

今ぞおの浦に於ては海に流るる水も蓬ありけり

土人相傳維盛赤色の澳にて伴つて入水の体よりては逃きて那智山の辺り色川

郡大野村とる地よこ幸むり潜びぬい余後十津川有田の奥におん塾居有

とて今尚有田の奥安田村とる地よ小松某とて裔孫ありけり

濱之宮

那智の庄濱宮村より宇久井の浦より此地まで行程一里之濱宮とも云街道の傍

本社 王子権現 里俗に三所権現ト云盛衰記に濱の宮の王子の御前より一葉のつら

丹敷戸畔社 本社の左有 狐神社 本社の右有丹敷戸畔の 御供所 本社の前

夫木 終夜沖の鈴鴨羽うりて法のまゝいさひはみづ川 源仲正

渚之森

濱の宮の境内の森といひ紀路名所記見ゆ

贊古 村町多歳しゆそりて日とつこの法の敷ははれあむむ 衣笠

紀路歌枕抄曰牟婁郡那智の濱辺の宮と有此宮と哭澤森と云ふと井

抄に哭澤杜渚森とも紀伊國あり若同所抄多む記沢と有渚の森や假

名の書録とも有ぐや決一は但薄塩草の説に渚の宮ハ那智の濱宮

るに哭澤森おつるは若又濱の宮哭沢女命とも有るん此更まるとは

按に當渚社の祭神詳しむ只王子権現と称はり哭沢女命ハ有は

哉此神ハ伊弉册尊化去すの時伊弉諾尊歎くその其涙おちて神と為る其名

哭沢女命と号くと日本紀に見るべ則ち伊弉諾尊の王子といはる能野社





平山

神垣やまゝ  
 秋風を  
 松のまへ  
 伊尹



濱之宮  
 補陀洛寺

西ノ七十三



して王子の社と号すは是の義よりなり 萬葉集に天の社と号す

詠たる大和國香山の哭澤の社の事あり 畧解に見えり

補陀洛寺

漢の宮の傍に天台宗して那智山権現の社僧の中則ち漢宮と守護

本尊 千手觀世音 兵不動明王 地藏菩薩 賓頭盧尊者の像あり

南紀名勝畧誌曰當寺の僧往古補陀洛山に渡ると新し船と造り二具

食物と貯風任せ南海に放ちるなり是觀音の道場生かす至るに

あり其外昔僧俗に限り存生の内補陀洛渡海の事有るは言傳る中古

より此夏廢せり口今も補陀洛寺の住持遷化の時死骸と舟のせ此浦の沖捨る

あり是と補陀洛渡海と云

貞永二年五月の末紀州系我の莊より一封の書と武藏守平泰時に奉る即ち

將軍頼朝の御前持系にて周防前司親實に送り昔右大將頼朝郷下

野國那須野の御狩の時大なる鹿列卒の内一鬼下る頼朝郷御覽せられ殊に勝

る射手と選られ下河辺六郎行秀に仰付らるる行秀嚴命と蒙り馳向て矢と

放つ鹿を列卒の外に走せ出ると小山左衛門尉朝政一矢にて射り下

河辺行秀盲目と失ひ狩場にて髻と切出家して逐雷行方と知る人なり

り智定房と名を改め暫く山中に籠り行ひに熊野の那智の浦より舟に乗て南海

補陀洛山を渡り其用意屋形舟にて後より外より屋形の戸を釘づけ四方

意も日月の光を見ることなく燈火と幽し食物も粟栢と少く命をたすけ心

法華と讀誦して二十余日して到り著の岸に上りて山の姿を拜りぐるに山徑

危く険しく岩谷幽邃るり山の頂より池より大河と流りて山を巡りて海に入

地の辺り石の天宮あり觀世音菩薩遊行の所なり願行満ちる人なれば

登りて菩薩と拜ると智定房此山に五十余日留りて御経と讀奉り又舟

来て熊野の那智に到りて同法の沙門に書とつくと武藏守殿に進らせり在俗

の時より馬の友と候ひに智定房出家以後の事どもと具に記して奉り哀を

あはる事どもを後に行末と名づけらるるに更に復知人ありと智定又

舟に補陀洛山に渡りもやん知れども 德集



按西域記及び經所説の補陀落山南天竺にて光明山と云日慈山といひ金剛輪  
 又六孤絶山と号く此智定房の渡りて昔文徳天皇の御宇慧華法師漂流して  
 補陀落山に到り海辺に庵をむすびて住居し終に伽藍を営み觀音と安置し補陀  
 落山寺と号け又黄檗隱元禪師も未だ俗より時此山に登りて善提心と發し  
 所して震旦の東南の海島あり日本より海路凡二百里許りて迤邐所を  
 佛祖統紀に是を佛説の補陀落山ありといひ日本にも是を光明山ありとあり  
 震旦の南海に孤絶の山あり故に南天竺の名を擧げて補陀落山と号け  
 あり譬して東都に愛宕山あり浪華に清水寺あり有るに今も唐人日本に  
 来るに於て動すれば此補陀山に船をよせて泊り順風を待てたり又泉州堺乃商人  
 長崎に至つて唐人の會せし夏の事ありて補陀山の揚梅ありとて与りて結  
 せし又元禄の初に濱州塩館の廻船大風を吹放されて補陀山に至り伽藍を拜して  
 歸きしと云然れば日本より海路遠くべし凡人も能くれば天竺の光明山より  
 けりてるあり分明あり



